

inkopr ess.com  
www.inkopr ess.com

続地球温暖化の果てに 第二部

やせ細る列島

生野以久男

## プロローグ

地球温暖化の果てに生じた大気大循環の攪乱が地球の自転を狂わせ、マントル変動を起し、プレート異常を招いた。そして日本列島から首都圏の広がる関東平野が切り離なされて島（首都圏島）となってしまふ。やがて、島となった首都圏は日本海溝へ滑り落ちていき、日本は大混乱に陥る。

地球温暖化の果てに生じた地球システムの攪乱は収束するどころか、投石によって生じた水面の波紋のように地球システム全体に広がり、気候システムばかりでなく、地球の自転、マグマやマントルの動きにもさまざまな影響をおよぼし出していた。

日本国内では、首都圏島から救出された被災者と太平洋岸を襲った巨大津波の被災者が住むところもなく、働くところも無い、難民となった。行く宛てのない大量の難民が地方都市を目指して移動していく。いたるところで衝突や争いを引き起しながら、難民たちは全国へ向って彷徨い出していく。

日本の首都をターゲットとした首都圏島沈没事件は、日本列島だけの問題ではなかった。これは地球における地殻大変動のはじまりの合図だった。

二酸化炭素などの温室効果ガスの排出が絶えることなくつづくなか、地球温暖化の暴走によって、高緯度地域で気温が著しく上昇し、北極圏の海氷は消え失せ、南極でも氷床が超スピードで溶け出していた。

ことに、グリーンランド氷床の溶融が激しく進んでいた。氷床表面から底の岩盤へ通じる大きな穴が出来、溶融水が滝となって流れ落ちた。水は窪んだ岩盤に溜まり、巨大な地下湖を形成していった。

また、日本列島から首都圏を奪い取る地殻変動を引き起したマントル変動が密かに北極圏と南極圏の地殻をも動かして出していたのだ。

# 第一章

1

「先生、九鬼先生……」

佐藤は何度も呼びかける。返事がない。受話器を取ったらしいが、声が返ってこないのだ。電話が通じないのだろうか。

佐藤由紀夫はM新聞の少壮の科学部記者だった。すでに六、七年前になるが、九鬼陽一郎が大学にいるとき、毎日のように研究室へ顔を出していた。

九鬼は異能な気象学者だった。気候変動予測モデルの開発に特別の才能があった。だが数年前、研究を止めると言い出し、大学を去ったが、いまは大気圏に関する世界有数の研究機関である米国のACARへ移り、地球全体モデルの開発を行っていた。

彼は受話器の通話口に向つてもう一度呼びかける。だが返事がなかった。彼は電話を切つて、受話器を返す。だがなぜか、彼には受話器の向こう側に受話器をもったまま息を潜めた九鬼が立っているように思えてならなかった。

彼には不思議でならなかった。思い返してみると、これまで九鬼が出した予測結果はほぼすべてが的中しているのだ。九鬼の予測にはいろいろなニュアンスがあつて、そのまま聞き流してしまうこともあつたが、予測幅があつてもその幅から大きくはずれたことがないのだ。

だが彼はこのことに長い間全然気付かずしていた。研究室に出入りし、気

楽に話するようになって、深く考えることなく、九鬼の話をごく当り前に受け取るようになっていたのかもしれない。

このことに気付いたのは、彼が首都圏島とともに海中へ沈み、九死に一生を得る体験をしたあとだった。

この体験を境に、彼にとつてこれまでの人生とこれからの人生とが全く別物になってしまった。なぜか、そう見えるのだった。これまでの自分の人生が全く別の人の人生かのように、細部までがまるで絵に描いたように極めて客観的に見えてくるのだ。

あのとき、おれは一度死んだのだ、そう思えて仕方がなかった。

死んだと思っていた齊木治郎も生きており、白頭大人先生も生きていたのだ。こんなことが重なつて、次第に現実感が蘇ってきたものの、一度死んだのだという思いは消えることがなかった。

一度死んだと思うと、彼の目からいままで見えていたさまざまな夾雑物が消え、本体が見えてきた。表面を覆うさまざまな飾りや覆いが透けて骨組みや構造が浮かんでくるのだ。

彼のこのころのなかで、なにかが変わつた。同僚たちから「人が変わった」とよく言われた。だがなにがどう変わったのか、自分ではよく分からなかった。自分が自分でないような気がした。自分の行動をもうひとりの自分がじつと見ているのだ。彼はもうひとりの自分のまえで、いつも演技している自分を感じた。

一体、どつちが本当の自分なのか。どちらが死んだ自分なのか。彼はふたりの自分を往き来しながら、迷いつづけていたのだった。

そんな思いに囚われて毎日を過しているうちに、彼は無性に九鬼に会いたいと思つた。だが大学の研究室と違い、異国にいる九鬼と会うことは叶

わなかつた。せめて声でもと思い、電話したのであった。

彼には受話器の向こうに九鬼がいることが分かっていた。彼はじつと耳を澄ます。ふと、九鬼の声が聞こえたような気がした。彼は耳を傾け、必死に九鬼の声を聞き取ろうとする。だがダメだった。必死に九鬼の声を捕らえようともがくが、もがけばもがくほど声は逃げて遠のいていくのだ。

何度やっても同じだった。

彼は目を閉じた。腕組みをして、声が戻ってくるのを待った。

「佐藤さん、電話が鳴っていますよ」

彼にはなにも聞こえない。

同僚の一人が彼を揺すった。電話機から受話器を取って、受話器を彼の目のまえに突きだす。

彼は目を開け、受話器を受け取る。こんなことはまえにも何度かあった。だが彼は居眠りしていたわけではなかつた。目を閉じていた彼に同僚の声も電話のベルも聞こえなかつたのだ。

不審そうな同僚の目を感じながら、彼は受話器を耳にもっていく。強く押し付けてもなにも聞こえてこない。彼は急いで受話器を右から左の耳へ持ち変える。

「もしもし……」

なにも聞こえない。

「どうした……。聞こえないのか……」

同僚が口を動かしているが、彼にはなにも聞こえない。

同僚はメモ帳を取りだし、机に広げ、余白に「聞こえないのか」と書いた。彼は大きく頷いた。その拍子に耳のなかに詰まった水が揺れるように感

じた。彼は椅子から立って、何度も頭を振った。耳の奥からも出てこなかつた。耳鳴りがした。耳の奥でキーンとする高い音が響いた。

彼は椅子に戻り、机に向い、両手で頭を抱えた。キーンと高い音が鳴りつづく。彼はそのまましばらくじっとしていった。

同僚がメモを突きだした。「医務室へ行け」とあった。

そのとき、同僚は口でも同じことを言ったらしい。

彼は同僚の声を聞いたような気がした。

「分かつた。もう一度言ってみてくれ。左が聞こえるような気がする」

微かに同僚の声があった。彼は急いで、左の耳穴に人さし指を突っ込んだ。

途端に、同僚の声が消えた。

「右はダメだ」

彼は耳の穴から指を放す。

「突発性難聴かな。海に放り出されたときの後遺症かもしれないぞ。早く医務室へ行つてこい」

同僚は彼から離れ、背を向けた。

彼はあの夜を思い浮かべた。地鳴りとも地響きとも違った轟音のなかで気が遠のいていったのだ。そのあとのことはなにも分からなかつた。多分、あのあと、彼は首都圏島とともに海中深く引きずられていったにちがいない。

だが海水に入った途端ガスが発生してライフジャケットが膨らみ、海中へ引きずり込まうとしていた首都圏島の手から逃れるように、彼は海中から海面に急浮上したのだ。そのときの急な気圧変化で聴覚に変調が生じていたのかもしれない。

彼はもう一度左の耳穴に人さし指を押し込んだ。やはり、音が消えた。

もしライフジャケットを着ていなければ、彼は首都圏島とともに日本海溝の底まで引きずられていったことだろう。ライフジャケットで命拾いした代償が突発性難聴ということだったのか。

なぜ、両耳が突然難聴に陥ったり、片方だけが聞こえたりするのか。彼は左の耳穴をほじくりながら、またいつか両耳が聞こえなくなるかもしれないと不安に思いながら、机から立ち上がった。

## 2

首都圏島（日本列島本州から切り離された関東平野）が海中へ姿を消し、巨大津波が襲ってから一か月が過ぎた。太平洋沿岸の各地には巨大災害のツメ跡がいまだにいたるところに生々しく残っていた。

首都圏島沈没と巨大津波の被害についての政府の正式な数字はいまだに発表されていなかった。これまでのマスコミの大雑把な集計によると、犠牲者（行方不明者を含む）は約二〇〇〇万人、それ以外の住居を失ったり、家屋が水浸しに遭ったり、あるいは怪我したりした被災者は約二〇〇〇万人に上った。

そのほかに、負傷者もかなりの数だったはずだったし、被災を免れたものの、避難を強いられた住民も多くいた。

経済的損失についてもいまだ集計されていなかった。東京沈下が始まってから発生した損失のほかに、首都圏島となったあとのものと沈没によるものがあり、それに巨大津波による損失が加わるのだ。

すべてを総計すれば、これで日本の全財産の約三分の二を失ってしまった

たのではあるまいか。首都圏島の沈没と関西圏や中京圏の大都市群や太平洋ベルト地帯の工場群に対する巨大津波による土地建物の流失だけでも、日本は一瞬にして半分の物的財産を喪失したことだろう。

だが巨大津波の被災が日本列島の太平洋沿岸全域におよび、その範囲があまりに広く、いまもって被災範囲や程度さえ特定できずにいたのだ。

太平洋沿岸の市町村の多くでは一応行方不明者の捜索が一段落したもの、いまだに遺体が海岸に流れ着くことがあつて、沿岸自治体への該当者の照会や火葬・埋葬等の作業がつけられていた。

一方、被災地では避難所が避難民で溢れていた。テント村だったり、公民館や学校など、各地で避難所の状況はさまざまであった。

人口の少ない市町村はまだよかったが、人口が多い大都市では食料や飲み水が十分行き渡らず、避難所から溢れた飢えた避難民たちは復旧が進まないことに業を煮やし、内陸部の近隣市町村や日本海に面した都市へ、食べものや住み処を求めて集団移動を開始していた。

避難民の通過市町村では盗みや掻払いが横行した。果樹園や野菜畑が荒らされ、たき火のあとやゴミの山がいたるところに残された。

ことに、中部や関西からの避難民が多かった。伊勢湾周辺から一〇〇万人、大阪湾周辺から一五〇万人、計二五〇万人にもおよぶ避難民が大挙して太平洋沿岸から日本海岸を目指して移動したのだ。彼らの多くはゼロメートル地帯に住んでいて、巨大津波で家屋もろとも全財産を奪い去られてしまい、着の身着のままだった。そのうえ、ゼロメートル土地は海の中へ沈んだままだったのだ。

太平洋沿岸の市町村は広範囲にわたって被災しており、復旧工事をする余力は殆ど残っていなかった。専ら避難民の救済活動にあたっていたが、

いまでは避難所維持のほか、遺体回収や飲み水の給水などを細々とつづけている状態だった。

避難所の環境や待遇が日増しに悪化していった。食べものは不足がちだし、飲み水さえ十分でなかった。風呂に入ることや洗濯することはできなかつた。飢えと熱中症の危険に襲われ、蚊やハエが飛び交い、悪臭が漂い、衛生状態も極度に悪く、感染症の危険に曝されていた。

水没を免れた地域も同様だった。水道や電気などライフラインはなかなか復旧せず、海水を被った土地や建造物は洗浄されずに放置されたままだった。

避難民は食べものや水浴び場所を探して、近隣をうろつく。野菜畑ではキュウリやナスを無断でもぎ口にする。牛乳パック三万本、コメ一五トンとか、医療スタッフ五五人とか、タオル、おむつとか、当初はなにかとさまざまな救援の手を差し伸べてくれた近隣市町村も、避難民の転入を拒否しだした。また農家は自警団を組織してブドウや西瓜の盗難に備えた。

巨大津波の影響は津波の被災範囲を超えて全国へ拡大していった。世界経済を牛耳る金融資本が新自由主義を唱え、自由貿易を旗印に、市場拡大のためのグローバル化を進めるなかで、日本は後追い気味に規制緩和を図り、日本企業はヘッジファンドや金融資本の格好な標的となっていた。それでもなお日本経済は外需依存の経済体質を変えようとはせずに、政府は大企業と二人三脚で経済運営を図っていたのだ。このため、弱者と強者の格差が広がり、人口の高齢化とともに貧困層が拡大していった。

政権が変わり、若干の軌道修正が図られたものの、大改革には至らず、時が経つに連れ、官僚がふたたび政治の中枢に入り込んでいた。

そんななかで、東京沈下がはじまったのだった。五年後、日本列島から政治経済の中心である首都圏がもぎ取られて海の藻くずとなって消え、巨大津波が日本の陽の当る場所である太平洋ベルト地帯を総なめにし、日本を半身不随に陥れてしまったのだ。

大企業はいち早く日本から脱出し、日本経済は一年近く経ってもいまだに立ち直れず、いまだに半身不随のままだった。

政府は被災地の復旧、復興対策のために必要な財政緊急措置に関する特別法案の国会提出を図ろうとしていた。だが被災市町村からの情報がなかなか集まらず、官僚や政治家は取りあえず実施可能な分からはじめ、全体構想が固まったところで、本格的な特別法を制定することになった。

官僚が苦し紛れに考えた二回に分けた「二段構え」特別立法作戦はうまくいくように見えたが、いつまでたっても陽を見ることがなかった。

対策の全体構想が固まるまえに、新たな事態が日本列島を襲ったからだ。そして巨大津波の被災市町村はもう一度海水をかぶることになる。だがこの海水は引くことがなく、海はさらに奥地へと進んでいくのだ。

3

「電話くれた？」

九鬼だった。佐藤は受話器を右に持ち変えてみたが聞こえない。彼は急いで左の耳に戻した。

「うん、でも……」

「どうかしたの、元気がないようだけ……」

「うん、実は……」

彼は耳が聞こえないこと話そうか迷った。

「……………」

受話器の奥から九鬼のゆったりした息遣いがする。彼が話すのを待っているらしい。

「実は突発性難聴らしく、耳が聞こえなくなることがある」

「え？ いまは聞こえているんだね」

「首都圏島沈没のときの後遺症かもしれない……」

彼は首都圏島沈没のときのことを思い出したくなかった。思い出せば、さらに症状が進み、両耳が聞こえなくなるような気がするからだ。

「そうか……」

と言ったとき、九鬼は黙ったままでいる。

「……………」

彼も口を開く気になれなかった。受話器の向こうに九鬼がいると思うと胸が熱くなった。

「ところで、巨大津波の被災地はどうなっている。破壊された防潮堤などの復旧工事をはじめているの……」

「いや、まだ殆どが手付かず状態だ。大阪や名古屋などの大都市周辺のゼロメートル地帯は水没したままの状態だし、日本列島の太平洋沿岸の港湾施設も殆どすべてが損傷を受け、使いものにならない。船舶、ことに小型の漁船は全滅してしまっし、小さな漁港は完全に破壊され、漁村が消滅してしまっしところも多い。漁村だけではない。農村地帯にも壊滅的被害が出ている。低地の水田や畑は海水を被つたり、土壌が流されたりして、農作物の作付けができなくなっている。土石や舟の残骸、流木で埋め尽く

された田圃や畑も多い」

彼は急に饒舌になった。自分でもなぜか分からなかった。

突然、水没した水田に何体もの遺体が浮いている情景が頭を過る。彼は

ふたたび口を閉ざしてしまっし。

ふたりはしばらく口を開かなかつた。それでも彼は力を入れて受話器を左耳に押し付けていた。

「まえにも言ったことだけ……」

九鬼の一段と抑えた声がした。一息入れて、つづける。

「……近いうち、グリーンランドの氷床が大崩落しそうだ。その結果、地球システムになが起るか……」

グリーンランドは北極海から北大西洋にまたがる世界最大の島である。

大半が北極圏に位置し、殆どが氷床と万年雪で覆われているが、近年、地球温暖化で氷床が激しく溶け出しているのだ。

九鬼はつづけてこんなことを言った。

グリーンランド氷床の大崩落は単に海面上昇をもたらすだけではない。

グリーンランド氷床の大崩落は北大西洋から発する地球規模の三次元海洋大循環（海洋熱塩大循環）にとどめを差すことになるかもしれない。

気候変動で生じた大気大循環の乱れは地球の自転速度の変化を招き、マントル流動が変化し、太平洋プレートを押し上げ、ついに日本列島から首都圏（関東平野）を切り離して日本海溝へ沈没させてしまっし。これと同じように、いやこれに劣らず、地球規模の海洋大循環の変調は海面上昇と相まって、地球システムに大きな影響をおよぼし、さまざまな天災や地変をもたらすことになるだろう。

それはまるで巨大な池に生じた大きな波紋のように、地球システムに生

じた攪乱が時とともに地球全体へ広がっていくことだろう。これらの波紋に対して、地球システムがどのように反応し、地球全体にどのような影響が生ずるのか。現在開発中地球全体モデルで予測を試みているところだが、最悪の場合には地殻大変動が起り、世界の陸地の約三分の一が沈下して海中へ没してしまうことになるかもしれない。

「なんだって……」

彼は一瞬また九鬼のオーバーな予測がはじまったと思った。九鬼には警告を発したがる癖があった。一刻も早く十分な対策を講じさせたいという思いからなのだが、はじめて聞くときは彼でさえもいささか常軌を逸しているように感じるのだった。だがいつのまにか九鬼の予測通りになって、大筋では大きく外れることがなかった。

とはいっても、世界の陸地の約三分の一が海中へ没してしまうというのは、いくらなんでもオーバーすぎるのではないか。首都圏が沈没し、巨大津波で大平洋岸が総嘗めをくった日本列島はどうなるというのだ。

「もつとも最悪のケースだがね。こんなことにならないことを願っているけど、条件が揃えばそうなる可能性は捨てきれないだよ。まあ、それはそれとして、海面上昇はもうはじまっていると考えておいたほうがいい。そう遠くないうちに急上昇することになるだろう……」

「そうか、それでいつごろまでに……」

彼はふと斉木のことを思い浮かべた。いまだどこにいるのか、連絡がなかった。なんとかして海面急上昇のことを伝えたかった。

「遅くとも一年以内だな、多分。最初、グリーンランドの氷床が崩落し、つづいて西南極の氷床が崩落するだろう。これで海面は一〇メートルから二〇メートルほど上昇するにちがいない。崩落が一度に起こるかどうかは

分らないが、現状から見て、氷床の崩落は、たとえ途中で一時的に中断することがあっても、ほぼ継続して発生することになるだろう。グリーンランドからはじまり、やがて南極大陸へと……」

グリーンランド氷床の溶融はかなり進んでいた。温暖化による気温上昇と夏の強い日射で氷床が解けて表面に水が溜まり、無数の湖ができていた。その水が氷の割れ目を通して岩盤へ流れ込み、岩盤に溜まった水が氷床を下から押し上げるのだ。

岩盤から離れて浮き上がった氷床は滑りやすくなって、海へ滑落していくことになる。こうして海面が上昇すれが、岩盤と氷床の間に海水が入り込み、氷床をさらに押し上げ、一層滑り易くなる。

このような氷床滑落のメカニズムはグリーンランドだけでなく、南極においても同様なのだ。

地球上に存在する氷の九九・七パーセントが南極大陸とグリーンランドにある。殆どが南極大陸の氷床で、グリーンランドの氷は九・一パーセントにすぎない。だがその氷の量は約三〇〇万立方キロメートルで、これが融けると、海面を数メートルから一〇メートル超上昇させる。南極大陸にはその一〇倍の量の氷が存在する。

九鬼は氷床融解の現状からみて、グリーンランドでの大崩落現象が間近に迫っているというのだ。

「一年以内に、一〇メートルか……」

「いや、もう少し上がるかもしれない。近々、グリーンランド氷床の崩落で一〇メートル前後上昇し、つづいて西南極氷床の滑落でさらに数メートルほどかな……」

「一年以内にそんなに海面が上昇するのか……、だが……」



彼はいまもって巨大津波の復旧工事が進んでいないことを思い浮かべた。

「これからでは防潮堤などの海面上昇対策は間に合わないだろう。それよりも避難対策を徹底して、犠牲者がでないようにしたほうがいい。とにかく日本の海岸線は長過ぎるからな……」

九鬼は佐藤の心中を察したかのように言う。

「うん、一度、そのことについて、論文を書いてくれませんか。もちろん、海面急上昇の予測のことも含めてですよ」

彼は受話器を戻しながら、なんともやりきれない思いに囚われていた。巨大津波に打ちのめされた大太平洋沿岸の人びとにふたたび海が襲いかかるうとしている。

だが今度は大太平洋沿岸だけではない。日本列島の海岸全体にくまなく一〇メートルを超す海が襲い、呑み込んでしまう。たとえ、住民たちがスムーズに避難できたとしても、巨大津波の場合と異なり、被災者は永久に住み処を海に奪われ、帰るところのない難民となってしまうほかないのだ。

巨大津波による大太平洋沿岸の難民に海面急上昇による新たな難民が加わり、大量の難民が低地や平野などの可住適地や農耕適地が海に呑み込まれてやせ細った日本列島を彷徨うことになるのだ。日本国中を右往左往する難民の大群を思い浮かべながら、彼はさらに日本列島に襲いかかるという天災や地変に思いを巡らせていた。

4

佐藤はやりきれない思いに駆られ、いたたまれず、本社ビルを飛び出し

た。

地球温暖化の果てに日本列島を襲った焦熱地獄や巨大台風から首都圏島沈没にいたるまで、すべてが現代に生きる人間が享受している現代文明のいわば副作用だった。このことが彼を一層やりきれない思いへと駆り立てていくのだ。

風はなく、春を飛び越してしまったように、茹だるように暑い。真夏にはまだまだ間があるというのに、気温はすでに三〇度を超えていた。

不意にあの日が蘇ってきた。一年まえ、首都圏が広がる関東平野が本州から切り離されて沖合いへ滑り出した日も、こんな暑い日だった。

彼はがむしやりに足を動かし、ひたすら歩く。胸に遣えた思いを誰かに吐きだしたかった。

東京沈下に際して建設がはじまった新首都ははまだ建設途上で、建設中のビルが目につく。巨大津波で損害を被り、ビル建設を継続することができなくなったのか、いたるところに土台から突きだした鉄骨の骨組みをそのまま放置してあるものが目につく。そのせいか、すでに竣工してしまつた国会議事堂や官公庁のビルの偉容さだけがひと際目立つ。

M新聞の本社ビルは国や政府関係のビルが集まる官庁街から二ブロックほど離れたマスコミ関係が集まる一角にあつた。周囲にはいまだに空き地のまま手付かずになっているビル建設用地が点在していた。

彼は空き地のなかを縦走する人影まばらな一〇〇メートル道路の広い歩道をひたすら歩いて行く。前方に官庁街のビル群が見えるが、彼には取材の当てがなかった。行き当たりばつたりにくつつかの省庁が入居している合同庁舎ビルに入り、エントランスホールをめざす。

誰でもいい。彼の頭には、間近に迫っている海面急上昇について話さな

ければという思いで一杯だった。

「課長はいま……」

廊下を歩いていると、後ろから声がした。振り返ると、薄暗い廊下の空間に白い顔が浮かんで見える。白川課長補佐だった。斉木の部下だ。彼は無意識で斉木治郎を探していたらしい。

「そうか。斉木は休職中だったな。それで新課長は……」

「まだです。いまはわたしが代行していますが……」

白川は斉木に復職命令が出ているという。

「どうして、また……」

「なにしろ、休職者が多くて、人手不足で困っているんですよ。それにいつまでも課長不在じゃ困りますし、でも『首都圏島』沈没後は全省庁でそんな傾向なんです」

「なんだと……、休職者がそんなに多いのか……。それでヤツはなんとやっているんだ。連絡は取れているんだろ」

「連絡は取れているんですが、課長には課長の考えがあるらしくて……」

白川はこんなことを言いながら、室内へ案内する。まえに比べると、広々としていて、明るい。窓から遠くの花々が見える。

「このビルは何階なの」

彼は天井の高いエントランスでエレベーターに乗り込んだとき、一五階のボタンを押したことを思い浮かべた。

「二五階建てです。このビルは……」

「そう。随分、立派なビルだね……」

「これも景気浮揚策の一環ということですよ」

白川は佐藤が批判がましいことを言い出すのを牽制するように、ぴしゃ

りと言う。

東京沈下が知れると、金融センターとしての東京の地位が危ぶまれ、外国資本が一斉に引き揚げはじめると、日本経済は極度の不景気に見舞われた。

日本経済が下降線を辿り出したことに慌て、政府は二〇兆円もの補正予算を組んで景気浮揚を目論んだが、期待したほどの効果はなかった。さらに、六〇兆円もの国債を発行し、官民挙げて景気回復に励んだのだ。その一環として、新首都計画が策定され、官庁ビル群の建設もそのときはじめられたのだ。

だが五年後、本州から首都圏（関東平野）がもぎ取られてしまい、海底深く沈没していった。そして日本列島を巨大津波が襲ったのだ。

結局、経済成長どころか、景気は一度も浮揚することなく、返す当てのない巨大な国債残高を抱え、日本経済は泥沼に足を取られ、ますます深みへと落ち込んでいった。

「あれは失敗だった……」

「いいえ、自然災害だったのですよ」

白川は政府の一員として、あくまで頑張るつもりらしい。

「ところで、例の評価委員会はあれが最後だったの……」

彼は話題を転じる。

評価委員会は東京沈下を対象設けられた沈下予知判定のための各種データの評価を行う専門家集団で、そのころ、斉木の課が事務局をしていたのだ。

霞が関の本省会議室で委員会を開催中、列島から切り離されて島となった「首都圏島」が日本海溝へ向って滑り出したのだ。

「廃止していませんが、開店休業といったところでしょうか。課長も留守ですし、それに委員の先生方も……」

「でもさまざまなデータが集まってきているんじゃないんですか」

彼は九鬼を思い浮かべながら、白川の顔色を窺う。

「……………」

白川は関心がないのか、それとも口出しを嫌っているのか、黙ったまま、口を開こうとしない。

「近いうち、海面が急上昇する。太平洋プレートやフィリピン海プレートへの影響は避けられないだろうな」

彼は白川に投げ付けられるように言い、踵を返した。彼を駆り立てていた強い気分もいつのまにか萎え、心中を支配していたなんともやりきれない思いも消えていた。

5

「先生、つぎを訪ねることにしましょうか」

白頭大人はじつと斉木を見ている。彼は白頭大人の目を覗く。とくに変わった様子は見当たらなかった。なのに、なぜか微かな胸騒ぎを覚える。

彼はもう一度、じつと白頭大人のこじんまりとした小さな丸い目を覗いた。かつてはいつも大きく見開き、鋭く光っていた目も歳とともに衰えを見せている。かといって、老人のしょぼしょぼした目ではない。鋭い光を秘めた目だ。

「そろそろ、きみは復帰したほうがいい。復職命令がきているのだろ」

ぼつりと言うと、白頭大人は目を背けた。

「復帰して何をしろと言われるのですか。世界が、日本がいままでのような人間活動をつづけ、世界の七〇億人のすべてが米国の生活を追い求めるならば、地球はいくらあっても足りない。全世界が早く先生の農園思想を基礎とした社会運営を実践しなければ、草原に放されたヤギが草を根刮ぎ食べ尽くして砂漠化を押し進めるように、人間活動によってやがて地球は荒廃し、地上は草一本生えない不毛の世界と化することになるでしょう。すでに首都圏をもぎ取られ、巷には飢えに苦しむ難民が溢れているわが国では、いまこそ大転換を図り、地球と共生すべきときではありませんか。農園活動を広げ、地球とともに生き、一人でも多くの難民を救うべきじゃないですか」

市場原理主義を掲げ、グローバル化した世界経済のもとで自由貿易を謳歌し、世界の富の掻き集めに奔走する国際金融資本や多国籍大企業が闊歩するかつての国際都市東京で、白頭大人はそれに抗するように、独自の考えで農園を経営し、自給自足型共同体生活を実践していたのだ。

「首都圏島」が日本海溝へ向ってすべり出し、沈没を間近に控えた日の夕刻、斉木治郎は佐藤由起夫とともに、農園を探して東京多摩の山奥へ白頭大人を訪ねたのだった。

大学を定年まえに中途で引退し、農園を経営していたはずの白頭大人は、小さなバンガローでひとり隠遁生活を送っていた。農園を解体し、後日に備え、同志や仲間たちを全国各地へ向かわせていたのだ。

その夜、農園思想に触発された斉木はひとり白頭大人のもとに留まり、佐藤だけが本州へ戻ったのだった。

斉木と白頭大人は沈没する首都圏島とともに海中へ引きずり込まれてし

まう。だが彼は白頭大人ともども巨大津波によって志摩半島の山奥へ打ち上げられ、一命を取り留めたのだった。

「難民一人を救うのも大事だが、だからといって、このまま農園運動をつづけていても日本を変え、世界を変えるまでにはなかなかない。国や政府は首都圏沈没や巨大津波の膨大な被害に驚き、いまだにどうしているのか分からず立ち往生しているようだが、いつまでもこれに立ち向かわずにおるとは思えない。いずれ、日本の復旧復興に本腰を入れて取り組むことだろう。問題は、そのとき、日本の将来に対してどのような構想やビジョンを持ち、どのようにスケルトンを描くかだ。現体制のもとで、旧来の産業構造を踏襲し、ふたたび経済成長を追い求め、失った経済力を取り戻そうとするのか、それとも、地球と共存する新しい世界秩序を築くために日本が率先して新しい経済社会のあり方を身をもって示そうとするのか……」

白頭大人は「低炭素社会の実現」「環境調和型で持続可能な経済成長」「環境面で優れた商品やサービスの貿易自由化」などお茶を濁してはならないと指摘し、日本は世界に先駆け、いまこそ有限な地球のなかで人類が存続する道を示すべきときだと説いた。そして彼が先頭に立って、国をそして政府を動かすべきだと熱く語り、斉木をじつと見た。

彼は自身の非力を思い、ただ戦っただけだった。成長志向の経済体制をそうやすやすと転換することはできない。官僚組織の保守性や恐ろしさを熟知している彼は白頭大人の熱弁に奮い立つことはなかったのだ。

彼は白頭大人の農園思想に共鳴し、各地で農園活動を実践している同志や仲間たちを訪ねたいという白頭大人に付いて全国をまわり、いきいきとした実践活動を目の辺りにして、これぞ日本の将来の姿とさえ思った。彼は官僚生活に終止符を打ち、実践活動に参加したいと思うようになっていっ

た。

だが彼は一人娘を連れて実家へ帰ったままに妻のことが気になり、辞職の踏ん切りがつかず休職したままにいたのだ。復職命令を知った白頭大人は農園活動に興味を示す彼の態度を官僚組織からの単なる逃避に過ぎないと思つたのかもしれない。

彼はこころのなかを見抜かれたような気がした。

彼は迷った。頭のなかで白頭大人の呟れた声が鳴り響く。彼は白頭大人が言ったことを何度も反芻した。

彼は意識していなかったが、こころのなかに生じた波紋が次第に大きく広がり出していた。

6

「よう、斉木か……」

受話器を取ると、佐藤の声がした。

「ああ……」

懐かしさが急にこみ上げてきた。声がつづかない。斉木は佐藤がどうしてここの電話番号を手に入れたのか訝りながら受話器を持ち替え、そばの椅子に腰を下ろした。

「いままでどうしていたんだ。白頭大人先生と心中でもする気か。復職命令が出ているというじゃないか……」

「ああ……」

「どうした。ポケたんじゃあるまいな」

佐藤のいささか苛立つ甲高い声が響く。

「ああ……」

「なんとか言え。ああ……だけじゃ、分からないではないか」

「どうしようか迷っている……」

「なんだと……、お前にも迷うことがあるのか。いまの日本列島には迷っているような時間がない」

受話器の奥の佐藤の声がますます甲高くなる。

「おい、またなにが起こるといのか」

彼は一瞬、首都圏島が沈没したばかりなのに、と言おうとして口を噤む。

「海面急上昇が間近に迫っているのだ」

「海面はじわじわ上昇しているが……」

彼は佐藤の甲高い声に辟易して、のんびり応える。

「いや、海面が急上昇するんだ」

佐藤は「いいか、分かったか」と言いたげな勢いで急ぎ込むように言った。

「海面急上昇？」

「一〇メートルから二〇メートルだ」

「いつまでに……、一〇〇年とか、何年も先のことじゃないのか」

「バカ言え。明日にも起こるのだ」

「ホントか。お前さんは東京沈下するときもそういつていたが、五年間も持ち堪えたんじゃないのか」

「海面が急上昇すれば、この日本列島はどうなるか。農園活動に本腰を入れるのいいが、そのへんのところを十分考えてやらなければ元も子もなくなる。日本列島はいままで倍加した厳しい事態に追いやられるのだ……」

……

「……………」

彼は佐藤の甲高かった声が急にトーンダウンしたとこに戸惑い、返事もせずにじっと耳を傾ける。

「それなのに、政治も行政も動こうとしない。いまだに、巨大津波の復興の基本計画すらできていない。一体どうしたというのだ」

首都圏島の沈没と巨大津波の後片付けすら終わっていない。まだ一年は経っていないが、大被害にやる気まで奪われたのか、それとも人手がないのか、被害地の復旧復興が思うように進んでいなかった。資金不足もあるが、被害地が広範にわたり、資材の手配もままならなかった。

「で、どうしろというんだ」

彼は喉の奥から絞り出す。

「自分の頭で考えろ。エリート官僚だろ」

「……………」

彼は「エリート官僚だから、自分の頭で考えないのだ」と言いたかった。エリート官僚は自分では考えることはしない。アイデアを出せば、上司はいつも「前例は」と聞く。そして業界の意見を聞いて、与党議員の了解を取れというのだ。

ふと、彼は白頭大人が「先頭にたつて、国や政府を動かすべきだ」と言っていたことを思い出した。官僚組織を知らないものは気楽にものを言うと思つたが、いまだに復興計画ができていないとしたら、もしかしたら、官僚組織が解体に瀕しているということか。いや、そんなことはあるまい。あれは不死身だ。

「さつき、迷っていると saying いたな。なにを迷っているんだ。農園活動

もいいが、いまは海面急上昇から一人でも多く救うことだ。近々、夕刊に九鬼博士の海面急上昇の予測論を載せる。早く復職しろよ。白川課長補佐が代行しているが、一五階からの眺望を楽しんでいるだけで、なにもやっていないようだ。評価委員会など開いているヒマはないぞ。いいな」

佐藤は言うだけ言うと、一方的に電話を切った。

斉木はしばらく切れてしまった受話器をもったまま、椅子から腰を上げることができずにいた。

7

「まだ迷っているのかね」

振り返ると、白頭大人の笑顔があった。斉木は小さく笑みを返し、ようやく立ち上がる。

彼は農園のメンバーに混じって、草取りをしたり、畑に苗を植えるのを手伝っていた。なにも考えず、農作業を手伝って体を動かしていると、ころが満たされる思いがする。作物が成長する様子や、飛び交うチョウやミツバチを見ていると、なにかしら神秘的な世界の出来事のような気がするのだった。

農園は小宇宙といつてよかった。彼はこの小宇宙に生きがいを感じていた。官僚として過したかつて生活は別世界のことのような気がするのだ。誰がなんと言おうと小宇宙を去りたくなかった。

「先生、海面が急上昇するらしいですよ。ここは……」

これまで何か所かの農園を回ってきたが、大半の農園は衰退した農村の

再生を目指して山奥の山間部に残された集落跡や減反政策で耕作が放棄された水田を取り込む形で開設されていた。これに対して、いま訪れている農園は海に面した北の荒野を開拓してつくりあげたものだった。

この農園は海に面しているといっても周囲を数メートルもある断崖絶壁で囲まれており、簡単に海に出ることができなかった。それでも海をなんとか利用しようと、いろいろ新しい試みがなされていた。たとえば、海風を利用した風力発電を設置し、その電力で海水を汲み上げて淡水化と海塩の回収を行い、水不足に備えていた。白頭大人も興味があるらしく、この農園での滞在が長引いていたのだった。

だが、もし佐藤が言う一〇メートルを超す海面急上昇が襲えば、折角の新しい試みの農園もひとまりもないだろう。この農園が首都圏島のように多くの人びとを道連れに海中へ没してしまうというのか。彼は心配でたまらなかった。

「そうか。それでいつ……」

白頭大人は小さな目で斉木の目をじつと覗く。その目は彼の心中を察し、それならなおのことここに居ていいのかと問うているように見えた。

突然、彼の脳裏に首都圏島が沈没していくときの情景が浮かんだ。

日本列島の下に潜り込んでいる太平洋プレートが逆の動きをはじめ、これによって本州から関東平野（首都圏）が切り離され、ひとつの大きな島（首都圏島）が誕生したのだった。白頭大人とともに筏造りに励んでいたとき、突然、首都圏島が滑走をはじめ、日本海溝への沈没がはじまったのだ。

その夜、首都圏島を直撃してきた巨大台風の高波にさらわれぬように、彼は筏に体を括り付け、まんじりともせず夜を明かしていたのだ。その

とき、雷が一度に一〇〇個も落ちたような轟音が響き、筏もろとも海中へ引き摺られて行ったのだった。

海水が頭上から滝のように襲ってきた。意識が遠退いていくなかで、体が激しく揺れていた。気がついたときには、筏が志摩半島の山奥の大きな樹にひかかっていた。

そのとき、首都圏島にはいまだに一八〇〇万人もの住民が残っていたのだ。

「ああ……」

彼は海面急上昇を思い浮かべる。全身に戦慄が走った。このままでは首都圏島沈没時の犠牲者数をはるかに超える犠牲者がでるかもしれない。

彼はその夜、白頭大人に復職すると告げ、家族のもとへ戻ることにしたので。

8

M新聞の夕刊に、九鬼の海面急上昇に関する予測シミュレーションと関連記事が掲載された。だがそれは間近に迫る海面急上昇の予測についてのみ触れたものではなかった。それから派生する影響全般に言及していた。

概要はこうだ。

海面上昇は気温上昇による山岳水河やグリーンランドなどの氷床の融解に加え、海水温の上昇による熱膨張による海水量の増大によるもので、現在もずっとつづいてきているが、問題はごく短期間で急激に海面が上昇するすなわち海面急上昇の発生がごく間近に迫ってきていることである。

世界を襲う海面急上昇はグリーンランドや南極の氷床の大崩落や大滑落によって生じるが、これは三期に分かれる。

第一期はグリーンランド氷床の大崩落だ。第二期は西南極大陸氷床の大滑落で、第三期が東南極大陸氷床の大滑落だ。

ところで、第一期のグリーンランド氷床の大崩落が間近に迫っているのだ。この夏の終りまでに大崩落が起こる確率はほぼ九〇パーセントである。

最近、グリーンランド氷床の融解スピードが著しく速まってきた。氷床には無数のクレパスが走り、氷が融けてできた水は大河のようになって流れ出しているが、そのまま表層を流れて海へ注ぐのは少なく、その途中で氷床にできた無数の大穴へ流れ込んでいっているのだ。大穴は垂直に岩盤まで達するものも多く、岩盤へ流れ込んだ大量の水は岩盤の表面に溢れて岩盤に接している氷床を融かして海へ入っていくが、最近では広くなった隙間に逆に海水が流れ込み、氷床を持ち上げるまでになっている。これで氷床が海へ向かって滑りやすくなり、すでに大崩落大滑落の条件がほぼ揃っている状態なのだ。

グリーンランド氷床は連鎖的大崩落のすえに全滑落にいたるが、そのメカニズムはこうだ。

地球温暖化で北極圏の気温が上昇し、グリーンランドの夏場の気温が高くなるとグリーンランド氷床が急速に融解する。氷床が融解すれば、氷に閉じ込められていた物質たとえば二酸化炭素などの温室効果ガスが環境へ飛び出す。

大気へ排出された大量の二酸化炭素などの温室効果ガスが北極海上空に漂い、温室効果をさらに高め、気温上昇を加速させる。これによって、氷床の融解を加速し、融解水の大量発生を招く。

大量の融解水が氷床表面の穴から岩盤へ流れ込み、氷床と岩盤の間に水が溢れる。岩盤に大量溜まった融解水が氷床を岩盤から持ち上げ、滑り易くしていく。こうして出現した氷床が滑り出し、氷床崩落の連鎖がはじまり、全滑落へ進むのだ。

グリーンランド氷床の大崩落大滑落のメカニズムはこのように考えられるが、これによる海面急上昇はどのように進むだろうか。

グリーンランドには氷床として地球上の水の一〇・五パーセントが存在する。この氷床全部が海へ崩落滑落すれば海面は一〇メートルから一五メートル上昇するだろう。

グリーンランド氷床の全部が滑落するとして、問題はそのスピードである。滑落が一斉に起こるか、徐々に進むかである。

グリーンランド氷床のような巨大な氷床は一端滑り出したら途中で止まるようなことはなく、さらに加速していずれ海へ向って滑落していくほかないのだ。

海へ達した氷床は先端から崩れ落ち、大小の氷塊となって海面に浮上して流れ出す。小さく崩れずに巨大な氷山となって流れることもある。氷床が海へ落ちれば、これによって海の水量が増し、海面が上昇することになるが、海面上昇の伝播速度は氷床滑落の量と速度による。たとえば大量の氷床が一度に海中へ滑落すれば、それによって生じた大波が津波のようにかなりのスピードで伝播していくことになる。これに対して、滑落スピードが遅ければ、大潮のときのようにじわじわと海面が上昇していくの間にか水浸しになっているかもしれない。おおまかに言って、滑落現場に近いところでは津波型に近いだろうし、遠く離れたところでは大潮型となるだろう。

とにかく、グリーンランドから遠く離れた日本列島附近では、海が忍び寄るようにやってきて、いつの間にか海に吞まれてしまうことになるだろう。

海面急上昇はつぎのような段階で進む。

第一期の海面急上昇は、多分、グリーンランドにおいて、最初の大滑落が起きてから数週間で一段落する。長くても数か月以内だ。これで海面は一〇メートル前後急上昇する。

第一期のグリーンランド氷床の大滑落が一段落すると、第二期へ入る。今度は南極大陸の氷床、ことに西南極大陸の氷床の滑落だ。この氷床が大滑落を起こせば、さらに海面を数メートル押し上げることになる。

では第二期の海面急上昇はいつはじまるか。第二期はあまり期間を置かず、ほぼ第一期に引きつづくかたちではじまるのではないか。

第一期の海面急上昇で南極海の海面もすでに一〇メートル前後上昇し、これによって西南極大陸の氷床が一層滑落し易くなっているのだ。標高の低いところでは、海水に浸かった氷床が浮力によって持ち上げられ、岩盤との間の隙間が広がり、海水も奥深く浸入しているからである。

滑落発生には南極の気温のさらなる上昇があれば申し分ない。過去のデータでは、グリーンランドの気温が低いときに、南極の気温が高くなっている。気温上昇を機に西南極大陸の氷床が動き出すにちがいない。

ではグリーンランドにおいて氷床大滑落後気温が低くなり、これに代わって、南極の気温が上昇するのはいつか。そのメカニズムはどうか。メカニズムはこうだ。

大滑落によって海へ滑り落ちた氷床が流水となり、やがて融解する。その結果、大量の真水が発生する。こうしてできた大量の真水は、塩分を含



む海水に比べて軽いので海面表層を広がり、北極海や北大西洋海域の海面を覆うように広がっていく。

北大西洋には海洋の三次元大循環である熱塩大循環のエンジンとなる深層海水の生成・供給ポイントがある。そこへ大量の真水が流れ込めば、真水が塩分濃度を下げ、深層海水の生成を妨げる。深層海水の供給が減少したり途絶えたりすれば、熱塩大循環も弱体化したり停止することになる。

熱塩大循環は地球上における熱分配の役割を担っており、気候の安定化にも寄与しているが、これが弱体化したりすると、地球上の熱分布が不安定になり、気候などに大異変が生ずるばかりでなく、地球システム全般にもさまざまな影響をおよぼすことになるのだ。

熱塩大循環が衰えると、これにともない、北大西洋へ向かう暖流のメキシコ湾流も弱まり、北大西洋から北極海一帯の気温が低くなる一方、行き場を失った暖かく熱せられた大量の海水が南極へ流れ込むようになる。そうなると、南極の気温が上昇し出し、海水温もさらに高くなり、南極大陸氷床の融解が一段と進み、崩落が進み、大滑落し易くなることだろう。

要するに、グリーンランド氷床の融解によって大量の真水が北大西洋へ流れ出し、熱塩大循環が変調をきたすと、海面急上昇の第二期がはじまるのだ。

第三期の東南極大陸氷床の大滑落は第二期が終結するまえに一部（棚氷などの崩落など）がはじまるかもしれないが、本格的な開始はさらに先になることだろう。

ところで、氷床の大崩落大滑落は海面の急上昇をもたらすだけではない。氷床の融解によって氷に閉じ込められていた二酸化炭素などさまざまなガスや物質、あるいはウイルスやバクテリアなどが地球環境へ放出放散し

ていく。たとえば二酸化炭素が大量に大気へ放出されれば地球温暖化を促進することになるかもしれないし、鉄分が大量に海水へ溶け出せばプランクトンを大量発生させ、海洋生態系を変えることになる。また、未知のウイルスやバクテリアなどが解放されて環境を汚染することにもなるのだ。

とにかく、大量の真水の発生は熱塩大循環への影響だけでなく、直接海流などの海洋システムや海洋生態系にさまざまな影響をおよぼす。これらは一次的影響で、さらに二次的影響へと広がっていくのだ。

ことに、地球上における熱分配の役割を担っている熱塩大循環の変調に寄る熱分配の機能不全は、地球上の気候安定化の阻害要因となり、これまでに倍加する気候異変を引き起こすことだろう。さらに問題なことは、熱塩大循環の変調はこのような気候システムの大攪乱を引き起こすばかりでなく、生物生態系はもちろん、地球システム全般にさまざまな影響をおよぼすということだ。

最後に、論文にはこんなことが付記されていた。

詳しく述べることは省略するが、ここで一言付け加えておけば、それはかつて気候システムの大攪乱によって発生した大気大循環の変調がマンデル流動を変え、地殻変動を呼び起こし、日本列島（本州）から一部（関東平野）をもぎ取り、それを日本海溝へ落としていったように（首都圏島の沈没）、海洋大循環のひとつを形成する熱塩大循環の変調は地球システム全般にさらなる大きな影響をおよぼすことになるのは間違いない。多分、海面急上昇と相俟って、さらなる気候大異変を生起させるばかりではなく、首都圏島沈没を超えるような地殻大変動を呼び起こすことになるだろう。

「いつから出ているんだ」

佐藤は広々とした執務室で新しい机に座っている斉木をじつと見た。久しぶりに見る顔は幾分やつれて見えるが、日焼けして引き締まった顔に目が鋭く光っている。一皮剥けたような感じだった。

「九鬼論文を読んだよ。もしあの通りだとすれば、早急に海面急上昇対策を講じないと間に合わないな。沿岸市町村には避難計画をつくってもらわないと……」

斉木は執務机のまえの椅子で、小柄な身体を机のうえに乗り出している佐藤をろくに見もせずに呟くように言う。

課長補佐の白川が顔を向け、一瞬目を光らせた。まえの狭い執務室では課長補佐の机は課長の机に隣接していたが、広くなった新しい執務室では課長の机の右手に間隔をおいて配置してあった。

「おい、他人事のように言うなよ」

彼はむつとして叫ぶ。

「所管外のことには口を出すできませんよ」

白川が口を挟む。課長代行をやっていた自負からか、しばらく休んでいた課長の言動を庇うように言うが、言外にたしなめる響きがあった。

「だったら、所管官庁へ働き掛ければいい……」

彼は苛々してきた。

「そんなことできません、チョッカイを出すようなまねは。それよりもあの海面急上昇予測はどうなんですかね。いくらなんでも、あれを丸飲みし対策の実施を迫るわけにはいきませんよ。そのまえにバックデータを明

らかにして、しかるべき機関でオーソライズされれば別ですが、誰もそのような予測を認めようとしませんからね……」

白川はますます調子に乗ってつづける。

「そう思うなら、早くそうしたら……」

「うちは海面上昇まで手を出せません」

白川はうんざりしたのか、投げ遣りに言う。

何百万人何千万人が被害を被るかもしれないことでも所管外なら手を出さないというのか。緊急時に所管外もへちまもあるか。いつまで縦割り行政をあくまでも遵守し、権力と省益を死守しようとするのか。明日にも海面急上昇が襲うというのに、そんなことを言っている暇があるか。こんな官僚組織が国を牛耳っているのだ。

彼は忌ま忌まし気に白川を睨む。かといって、どう反論すれば動くことしない官僚組織を動かすことができるのか分からなかった。

「斉木、なんとかしろよ。東京沈下や首都圏島沈没も結果的に九鬼先生の予測通りだったではないか。最初から九鬼予測に従っておれば、一八〇〇万人もの住民を道連れにせずに済んだかもしれないか。今回の海面急上昇予測を真剣に検討してみてはどうか……」

「……………」

「この種の問題は、少しでも発生可能性が考えられるなら、予防的対策を講じるべきものだ。いたずらに、予測に対して厳密な実証を求めてもムリだ。予測モデルを過去のデータでシミュレーションして過去を再現できれば十分なんだ。精密なチェックを要求しては、いざというときに間に合わない。予測がラフと思うなら、はずれてもいいようなラフな対策をしておけばいいでないか。予測の精度が上げれば、より堅固なものへ対策

を進化させればいい。頭から予測は信用できないと決めてゼロ対策で始終するよりも、発生可能性あるものなら、不十分な予測でも相応の対策をさつさと講じることが行政としては必要なことだろう。このような場合、行政や政治では経済効果や費用のことより、保険的施策を優先させるべきではないのか……」

「……………」

「海面急上昇は九〇パーセントの確率でこの夏まで発生するということだ。二酸化炭素などの温室効果ガス削減を巡って先進国と新興国と途上国とが対立し、地球を温暖化へ追い込み、拳げ句の果てに、現に異常気象や気候異変に悩まされているのに、海面上昇の対策もやろうとしない。できるできないといった問題ではないのだ。逃げているだけで、やろうとしないだけだ。きみたち官僚には絶大な権限があるのに、なぜ緊密な連携のもとに、互いに力を合わせて緊急時に立ち向かおうとしないのだ。きみが白頭大先生に従ったのは単に逃避するためだったのか。だとしたら、わざわざ戻ってくることもなかったのだ。多くのひとが家を失い、食べ物にも窮しているというのに、自分たちだけがこんなに立派なビルにいて、一体なにをしようというのか。なにもしないなら、テントで十分ではないか。海面急上昇の予測がデタラメだというのなら、海面急上昇が発生しないことを証明してみる。M新聞は単に読者受けを狙い、発行部数を増やしたくて海面急上昇の予測記事を載せたわけではない。首都圏島の沈没で一八〇〇万人を道連れにしてしまったことを反省して、こんなことが二度と起きないことを願い、キワモノと揶揄されそうなの緊急特集をあえて組んだのだ。この記事で、一人でも救われ、社会や住民の被害が幾分でも少なくなるように祈っているが、行政や政治はいつまで手を拱いているつもりなのか……」

…」

佐藤は言うだけ言うと、机のうえに両手を着き、身体を持ち上げるようにして椅子から立ち上がり、ゆっくり踵を返して、背を見せた。

## 第二章

10

海面急上昇に関する九鬼の予測に対する学界の反響は冷やかなものであった。学界だけではなかった。マスコミの一部が取り上げたが、面白半分だった。

だがテレビのワイドショーでは敏感反応したところもあった。

意外なことに、津波で被害を受けた港湾施設の復旧工事が一斉にスローダウンしたのだ。一時ストップして様子見をはじめたのもでた。ことに、小さな漁港の復旧工事での動きが顕著だった。予算消化などのためにやむを得ず工事を続行しなければならぬものであっても、目に見えてスローダウンしていったのだ。

工事担当者は津波以来、海面がもとに戻らず、盛り上がったままであることを不審に感じていたらしい。そこへ海面急上昇の予測が出た。テレビでも取り上げられた。それに、夏の終わりまでに九〇パーセントの確率で海面急上昇が襲うというのであれば、夏の間ゆっくり休んで、それが無事過ぎてから本格的な工事をはじめても遅くはないと考えたのかもしれない。た。

津波の被災市町村の反応も早かった。行政はハザードマップで水没の危険地帯を明示し、避難計画をつくり、住民に対して説明を繰り返した。だが海面急上昇を十分理解できず、津波対策を同じように考える住民が多かった。海面急上昇が襲ってくれば、土地建物を海に奪われ、海中へ閉じ込め

られてしまい、二度と住居に戻ることはできないのに、一度避難しても、また家には戻って来れるものと思っているのだ。

時が経つに連れ、海面急上昇の恐ろしさが住民へ浸透していった。

気の早いものは高台に家を移設したり、家の土台を高くしたりしたが、いまだに海面急上昇に対して半信半疑の住民も多く、彼らはじつと構えて動こうとしなかった。いや、移転先を確保できないものもいたり、資金を調達できず移転したくとも動くことのできないものもいた。また長年住み慣れたところから離れることができずに迷っているものも多かった。残っている人びとは毎日海を見ながらひたすら海面急上昇が来ないことを祈るほかなかった。

日本海側の沿岸市町村はいたつてのんびり構えていた。津波や台風の高潮の被害体験も少ないせいなのか、住民の関心も低かった。とはいっても、住民のすべてがそうだったわけではない。一部は高台の住宅を求めて引越すものもいたが、大平洋岸から巨大津波の被災難民が大量に押し寄せてきた地方都市では、海に近い街の中心部から離れた丘陵地帯や山麓を開発して住宅団地をつくり難民を収容したこともあって、二、三〇メートルの標高のある住宅地に余裕がなかった。これが旧住民と新住民の新たな対立要因となつていった。

このような市町村レベルの動きに対して、国の動きは鈍かった。政治も同様だった。ただ地元からの要請を受けた国会議員のなかにはひとりで奔走するものもいたが、地球温暖化を所管する省庁の担当者から国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）の海面上昇の予測が今世紀末で最大五九センチ（第四次評価報告書）であると説明を受けると、直ぐ活動をやめてしまうのだった。

梅雨が明け、太平洋高気圧が日本列島を覆い尽くし、ガラガラした太陽が終日照り出した。

佐藤は苛々して毎日を過ごしていた。

11

「佐藤さん、園部さんという方がきていますが……」  
受付からの電話だった。

エントランスへ降りていくと、若い男が受付のカウンターから少し離れたところに突っ立ち、あたりをきよろきよろ見回している。独立法人の研究所で地震のメカニズムを研究している童顔の園部だった。

「九鬼論文に驚き……、是非お会いしたいと思つて……」

園部は口籠りながら、深々とお辞儀した。

「あの節は、どうも」

園部をロビーへ誘いながら、彼は園部に連れられて、関東平野が本州から切り離されて首都圏島となるまえに沈下によつて生じた巨大な亀裂を見に出かけたときのことを思い浮かべた。園部は大方の地震学者と違い、関東平野が切りは難されて沈没すると大胆な仮説を立てていて、亀裂が広がっていることを彼に見せるために誘つてくれたのだつた。

「実は……」

園部は口を開くが、なぜかつづかない。

彼は目のまえの童顔の男を懐かし気に見た。あのときも童顔を紅潮させて自説を熱心に説明した。

「海面急上昇の予測はどうですか」

彼は童顔に促すように言う。

「海面上昇ですか。それよりも海面上昇によつて地殻変動が引き起されると指摘してありましたが、そのほうに興味があります。で、海面急上昇後の地殻変動について、九鬼先生がどのように考えておられるのか是非お伺いしたいのです」

園部は一気に言つて、大きな息を吐いた。

「あなたはどうか考えているのですか」

彼は園部の考え方を知りたかつた。

「実はあまり考えていなかったのです。地球温暖化で生ずる海面上昇に関するこれまでの予測では一〇〇年後に五〇センチから一メートルそこらとといったものでしたから、とくに海面上昇と地震の関係については考えていなかったのです。でも……」

国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、地球温暖化によつてグリーンランドや南極の氷床や山岳氷河が融解する量と海水が熱膨張する量から、今世紀末の海面上昇を最大五九センチと予測（第四次評価報告書）していたが、これにはグリーンランドや南極の氷床が崩落や滑落して海面を上昇させる分は含まれていなかった。

「海面急上昇は考えられないということですか」

「いいえ、いいえ、考えられないなんて、そんなことはありません。考えてみただけです。大いに、ありうることだと思います」

童顔は身体をくねらせ、必死に言い訳する。

むしろ、海面上昇予測になぜ氷床の崩落や滑落を考慮しないのか、不思議だとも言う。グリーンランドや南極の氷床がすべて融解するのには、何百

年何千年もかかるということだが、だからといって崩落や滑落を考えなくてもいいということにはなるまい。それとも大規模な崩落や滑落は起こりえないというのか。

「IPCCの連中はなにを考えているんですかね。グリーンランドや西南極では氷床の崩落がはじまっているのに……」

「予測が難しいのかもしれませんが」

童顔は研究者らしく、素人の考えることとは別に、研究の方法論のほうに思いがいくらしい。

「じゃ、九鬼予測は……」

新聞記者のあまのじゃくが出る。

「流石だと思います。先生は海面急上昇が三期に分かれて発生すると予測していますが、海洋大循環の変調は第一期のグリーンランド氷床の大崩落大滑落につづいて生じると考えていいのですね……」

園部はつづけて、大気大循環の変調が地球の自転速度を変え、マントルの変動を引き起こし、プレートの動きを変えたように、海洋大循環（熱塩大循環）の変調も同様のことを引き起こすことになるかもしれないのだという。それに加えて、海洋全域で海面が上昇した分の重さが地殻（プレート）に加わることになるが、その新たな荷重によってプレートの動きが影響を受け、マントルにも影響がおよぶことになるのだ。

「すると、海面急上昇だけでなく、首都圏島沈没のようなことも起こるということか……」

「そうです。第一期の海面急上昇のときから地殻変動が……。海面急上昇とマントル変動の相乗効果で……」

園部の声が震えている。

彼は血の気が引いたような白い童顔に目を据え、九鬼が海面急上昇だけでないと言っていたことを思い浮かべていた。

12

「海面急上昇によって地震が多発する可能性があるとするれば、お前の課の仕事として取り上げることができるのか……」

返事がない。佐藤は受話器の向こうで戸惑っている斉木を思い浮かべる。彼は構わずつづける。

「……グリーンランド氷床の融解で海洋における三次元大海流である熱塩大循環の動きがほぼ終息ことになるらしい。そうすると、いま以上の異常気象や気候異常が生じることになるが、これは住民たちにとってはいわば体験済みの異常気象や気候異常が幾分グレードアップしたと思えばいい。いや、もしかしたら、想像を絶するようなグレードアップとなるかもしれない。だがこれだけではない。首都圏島沈没と同様か、それに倍加する地殻変動が発生するというのだ。このことを見据え、いまずぐ国としての対策を立てるべきだ。ぼんやりしている暇はない。ふたたび、首都圏島沈没のときのようなヘマを繰り返すことは許されないぞ」

佐藤は意識して激しい口調で言う。ふたたび一八〇〇万人もの大量の犠牲者を出してはならないのだ。だが斉木は「うん……」と低い声で言ったきりだった。

斉木はとつと切れてしまった受話器を耳にしばらく付けたままだった。

佐藤の声が耳の奥で木霊する。白頭大人の顔が浮かんだ。なんとかしなればとところに思いながら、彼は漸く受話器を返した。だがなんのアイデアも浮かばなかった。

各省に散らばっている同期の連中に声をかけ、首都圏島沈没後の新たな日本の姿を考えようと働き掛けたものの、返事は返ってこなかった。首都圏を喪失した打撃は予想を超えて大きいのだ。彼らはここでの抛り所を失ったように意気消沈していた。新首都建設を進めなければならなかったし、それよりも慌ただしく引越してきたために書類の整理や新事務処理システムの点検整備に追われ、新政策や新企画を考えようとするものはいなかった。

まして海面急上昇に関心を示すことなど、全然なかった。そもそも海面急上昇についても、政府の地球温暖化対策となれば、国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）による予測が前提となる。IPCCのこれまでの海面上昇予測にはグリーンランドや南極の氷床の崩落や滑落が考慮されていないのに、「二一世紀末の海面上昇は最大五九センチ（第四次評価報告書）」という数値が一人歩きしていた。二一世紀末で最大五九センチであれば、まだまだ余裕があると受け取られていたのだ。

齊木が氷床の崩落や滑落による海面の急上昇が間近に迫っているといくら説き回しても誰も耳を貸そうとしなかった。IPCCのお墨付きである「最大五九センチの予測」が頭にあるかぎり、役人どもは、たとえ、海面急上昇と地殻変動の同時的発生が目の前に迫っていても動くことはないのだ。

「白川くん、評価委員会を開いてみるか……」

彼は苦し紛れに思いつきを口にした。課長補佐はなんと反応するか。

「はあ……」

白川の不審そうな顔が返ってきた。

彼は白川が不審がるのも無理ないと思う。評価委員会は東京沈下のためのものであったし、首都圏島沈没以来開催することはなかった。委員たちからもなんの問い合わせもなかった。評価委員会はすでに休止状態だった。だが彼は評価委員会を利用して海面上昇と地震発生の関係をチェックし、海面上昇による地震多発傾向に関心を向かわせたいと考えたのだ。

「よお、いつから出ていたのか……」

突然、大きな声があった。開いてあるドアから大きな身体の男が入ってきた。田中だった。東京沈下後、内閣府に設置された首都圏沈下対策本部に同じK省から出向していた同期の男で、首都圏島沈没まで現地に残って対策実施の現地責任者をしていた。

「ああ……、きみか」

「よく生きていたもんだな」

「お互いな……」

「あの日はどこにいたんだ」

「首都圏島にいた」

「ホントか。何度も電話したが……」

田中たちはヘリコプターを用意していたらしい。最後まで残って仕事をしてきた官庁の連中全員を沈没まえに首都圏島から連れ出したのだ。

「少しまえに、ひとを訪ねて他所へ移っていたんだ。それで首都圏島と一緒に海中へ沈む羽目になったが……」

齊木も一度は、首都圏島の沈没によって犠牲になった一八〇〇万人の住民とともに海中へ投げ出されたのだった。

「ホントか……」

田中は一瞬暗い顔になった。だが目には半信半疑の光があった。

「課長は役に拾われ、津波で志摩半島へ打ち上げられたのですよ」

白川が横から口を挟んだ。

「いかだ……」

田中の目から疑いの光が消えた。一八〇〇万人の犠牲者を出したことに對する思いからか、顔は一層暗くなっている。

「ところで、いまだここにいるんだ……」

「うん、まだまへのままで。いまの担当は津波被害対策だが……」

首都圏沈下対策本部は首都圏島沈没によって太平洋沿岸一帯に生じた巨大津波被害の対策業務を引き継いでいるという。

「官邸の対策本部はまだあるのか……」

「まあな。被災地の復興が残っているからな」

「そうだったのか。まあ、突っ立っていないで座れよ。話がある」

彼は右手を伸ばし、執務机のまえに置いてある応接セットを差した。

突っ立っている大男の暗い顔を見ているうちに、ひとつのアイデアが浮かんだのだ。彼はこの男を海面急上昇対策に巻き込もうと思ったのだ。

彼は机から立ち上がり、田中と向かい合う椅子に歩み寄っていった。

13

「話してなんだ」

田中は斉木が座るのを待っていたように言った。彼はじっと田中の顔を

見たままでいた。突然、耳の奥で佐藤の声がした。

「首都圏島のようなへまは許されない」

「なんだって……」

田中の顔が紅潮したかと思ったら、急に青ざめていく。

「一八〇〇万人の住民を救えなかったことを悔いている。もっと早く『警戒宣言』を出すべきだった」

彼は目を伏せ、自戒を込めて、しんみりと言う。

警戒宣言とは大規模地震対策特別措置法に基づき、大規模地震の「前兆現象」が見られた場合に発令されるもので、戒厳令なみの威力があるという。新幹線が止まり、高速自動車道が通行止めになり、学校は休校、公共施設は閉鎖される。地域住民は危険区域から避難させられる。

「われわれは最大限の努力を尽くしたんだ……」

田中は強く言うが、焦点の定まらない虚ろな目が左右に動いている。

「リスクを恐れ、躊躇しているうちに、首都圏が切り離されてしまった。

そのまえに『警戒宣言』を出していれば、一八〇〇万人を救うことができただけだ」

「そんなことを言っても、その時点では首都圏が本州から切り離されて流

されるなんて、誰も想像さえしていなかった……」

「いや、はつきりそう予測していたひとがいた……」

「誰だ。誰のことだ。例の素人先生の話か」

田中は九鬼のことをいっているらしい。

「それだけではない。若い研究者のひとりがあることを指摘していたが、学界はなにを若造がと彼の説を頭から無視していたのだ」

「うう……」



田中は口を閉ざしたままだが、微かなうめき声が洩れる。

「近々海面が急上昇するという。だが誰も耳を貸そうとしない……」

彼は殊更声を低めた。

「M紙の夕刊、あれはホントか。九〇パーセントの確率というが……」

「わたしには分からない。だがあれは東京沈下から首都圏島沈没までを的確に予測していた九鬼先生の予測だということだ。海面が急上昇すれば、日本列島はどうなるか。もしならの対策もなさなければ、海岸線の長い日本列島はいたるところが海に吞まれてやせ細り、甚大な被害を被ることなるだろう」

彼はつづけて「一八〇〇万人を超える犠牲者を出すようなことは許されない」と付け加えたかった。だがなぜか口から出てこなかった。

「それで話というのは、海面急上昇対策を実行しろということか」

「そういうことだ。きみなら、分かるだろう……」

彼は各省の連絡会などで機会を見つけて海面急上昇の対策の必要性を訴えてきたことを話した。

「IPCCの海面上昇予測が今世紀末で最大五九センチだとしているなら、この夏海面が急上昇するといっても、誰も見向きもしまい。政府を動かすことはできない」

田中も同じようなことを言う。

「IPCCの海面上昇予測では氷床の融解だけで、氷床の大崩落や大滑落を想定していないのだ。この夏までにグリーンランド氷床が大崩落や大滑落を起す。それで海面が急上昇するというのだ」

「ふーむ。じゃ、どんな対策が考えられるんだ。海面上昇では対策の範囲が太平洋沿岸のほかに、日本海沿岸にも広がる。いや、日本列島の海岸線

全域へ広がることになる。これじゃ、いまの津波対策をどう拡大解釈しても、このままではとてもムリだな」

「太平洋沿岸だけならできるのか」

「海面上昇対策といっても津波対策とあまり変わりないわけだな。かといって、太平洋沿岸だけやって、残りを放置できるのか」

「なんとか、早急に海面急上昇対策をしないと間に合わない……」

「そうは言っても……」

「きみが担当する対策の範囲が首都圏から太平洋沿岸一帯へ広がったのだろう。はじめは対策の範囲を太平洋沿岸に限定しておき、機会を見て、日本列島全域へ広げていけばいいだけだ」

「……………」

「範囲が広がるのが問題だというのが、海面上昇が襲ってくればそんなことは言っておれなくなる」

「どうして、そんなに海面急上昇が気になるのだ。IPCCの海面上昇予測がデタラメで、例の海面急上昇予測が正しいというのか」

「結論はそう言うことだ。時間がないから、きみの津波対策を活用して、まずは太平洋沿岸だけでも対策を講じたいのだ。とにかく、住民たちを早く避難させたいのだ。なにしろ、放射能を出しつづけている原子力発電所の集中立地地帯が海面急上昇でどうなるかわからないぞ」

巨大津波で臨海に立地してある化学工場や製油所、発電所などは軒並み大被害を受けた。殆どが建屋が流され、プラントの配管や機器が損壊してしまった。なかには土砂に埋もれてしまったのもあった。そのなかで、海水を被って水浸しになったものの、比較的頑丈につくられている原子力発電所の炉本体が収められているコアの部分がほぼ無傷で残っているのだ。

「どんな対策だ。たとえば、注意報を出すとと言っても、太平洋沿岸の市町村だけに限って『海面急上昇注意報』を出すことができるか。そんなことはできない」

「いま、津波対策を実施しているのだから。そのなかに織り込めばいい。とにかく、きみにもオレにも、首都圏島沈没で一八〇〇万人を見殺しにしたようなことを二度と繰り返すことはできないからな」

「……………」

田中は歯をくいしばって、彼をじっと見ている。

「オレはIPCCの予測に代わる海面急上昇予測のオーソライズを試みよう。とにかく時間がないのだ」

「空振りだったら……………」

「そうであれば、大いに結構ではないか」

「バカ言え。いまはムダにする金は一円もない。あれ以来、税金は激減したのに、復興のために莫大な金が必要なのだ。財政は赤字続きだし、経済の回復は当分望み薄だ。外貨準備も底を突き、エネルギーや食料の輸入代金の支払いにも事欠く有様なのだ。外国資本は逃げ出したし、国内企業の投資も外国に向いている。かつての工場群が太平洋ベルト地帯に戻らず、南アジアや東南アジアなどに向っているのだ。これで海面が一〇メートルも急上昇することが分かれれば、さらに逃げ出す企業が増えるにちがいない。海面急上昇の対策だと大騒ぎするのはどうかと思う」

「海面急上昇のことはマスコミで流されているから、大方は承知していることだ。信じるかは別だが……………」

「政府が警戒警報を出すのだぞ」

「まあな……………」

「問題は確実に発生するかどうかだが……………」

「予測に確実なことはない。海面急上昇発生の可能性が高くなれば、為政者として最善を尽くすべきではないのか。金が足りないから何もしないなら、為政者の資格はないし、それに仕えるものも同じだ」

「かといって、無い袖は振れない」

「知恵を出すんだ。取りあえず、きみから各地方自治体に向けて海面急上昇の注意報か警報を出せばいい」

「なんらの根拠もなしに、そんなことができるか」

「海面急上昇は太平洋沿岸だけを襲うんじゃない。日本列島を取り巻く海岸の全域を襲うのだ。その被災者は巨天津波の比じゃないぞ。巨天津波対策を担当する者として、それ以上の災害発生を見逃して放置しておいていいのか。海面急上昇は津波とわけが違う。海面下に沈没した土地はふたたび地上に顔を出すことはないのだ。日本列島は痩せ細っていくのだ。首都圏が海に吸い込まれていき、今度は日本列島の海岸辺りの低地がすべて海に吞まれてしまい、日本の領土が痩せ細り、小さくなっていくのだ。このような事態が目の前に迫っているというのに、金がないからなにもできないとは何事だ。できることは何でもしなければならぬのだ。日本はそして住民はどうなるか。言い訳は聞き飽きた。とにかく、日本列島に住んでいる一億の人口の大半が住処を失うかもしれないのだ」

「いまから慌てても、夏の終りまで三か月もない。なにやっても間に合わない。避難のガイドラインを配り、避難場所の確保程度しかできないだろう。各人がどう行動するかだな」

「とにかく、やってみてくれ。海面急上昇後の痩せ細った日本をどう立て直すかといった観点からの対策が考えられないかな」

「ムリなことをいうな。お前がギヤアギヤアいうからなんとかできそうな対策だけでもやってやろうと思っただけだ。海面急上昇が来なかったときの責任はすべてお前が負うんだぞ。いいな」

田中は立ち上がりながら言う、背を向けた。

14

「よお、どお……」

取り上げた受話器から、佐藤の声が漏れてきた。

齊木は机に戻ると、なにかが胸につかえているような気がして、田中と交わしたやり取りを思い返していた。田中ののらりくらりとした話し方に苛々したのか、最後に止めを刺すように激しく言ってしまったことが悔やまれた。折角、その気にさせておきながら、あれでは逆効果だった。このことが喉の奥に刺さった魚の骨のようになかなか取れない重しとなつて彼を苦しめた。だがあの一撃は彼の身体の中からはとばしるような勢いで口を突いて出たのだった。

結局、田中ののらりくらりとした煮え切らない態度は最後まで変わるこ  
とがなかったのだ。

彼は官邸の対策本部にいる田中の力を利用して海面急上昇対策を進めようとしたが、それは間違っていたのかもしれないと思ひ返した。権力の中枢である官邸サイドにいる田中にはどんなに口を酸っぱく言っても現状を変えるようなことは期待できない。おぎなりの海面急上昇対策ならいざ知らず、日本の未来を考えた根本的な対策に積極的になるはずがないのだ。

そのことによく気づき、自分でやるほかないと思つたとき、電話のベルが鳴つたのだつた。

「はい、ああ、きみか……」

「どうした……」

「早く海面が急上昇しないかな」

「なぜ、そんなことを知っているんだ……」

佐藤の怪訝な声が返ってきた。

「なんだと……、お前が……」

「いま、グリーンランドで大崩落が起きているらしい。連絡によると、氷床の大崩落で生じた大波がヨーロッパ大陸へ押し寄せているというのだ。探査衛星のデータをチェックしているといつていたが、多分、間違いないだろう。問題はつぎの大崩落が間を置かずに連鎖的に起こるかどうかな……」

「わが国、いや、日本列島への影響は……。ヨーロッパへ押し寄せている大波は津波のようなものか」

「今回の大崩落が一回きりで収まれば、若干海面が上昇するが、殆ど影響しないそうさ。連鎖して何回か継続すれば、大滑落を起し、親潮に変化が生じるかもしれない。海面も急上昇し出すことになるらしい」

親潮（千島海流）は北極海から千島列島沿いに南下し、北海道、北日本の太平洋側を流れる寒流で、熱帯から北上する暖流の黒潮（日本海流）と遭遇し、黒潮とともに東へ向う。親潮の勢力が強まれば、さらに南下し、黒潮の北上を阻むことになるのか。

「大崩落が連鎖的に発生しそうなのか、それとも一回だけで収まりそうなのか……」

「それは分からない。なんでも、今年の北極圏は気温が異常に高いそうだ。北極圏ではすでに平年よりも一五度以上上昇しているが、今年の夏はとて暑く、さらに気温が高まりそうだという。この気温では氷床がかなりのスピードで融解しているはずで、そうであれば、大崩落が連鎖的に発生してもおかしくないと言っていた」

「大崩落がつづいて起こると大滑落を起すということか」

齊木は気が気でなかった。海面急上昇の対策は全然進んでいない。このままでは巨大津波の二の舞いだ。ふいに、白頭大人の顔が浮かんだ。最後にいた海岸辺りの農園を思い浮かべた。

「各地方自治体へは海面急上昇対策を指示しているんだろうな」

佐藤は彼のところを見透かしたように言う。

「うむ……、グリーンランド氷床大崩落を夕刊の記事にするのか」

「ウラがまだ取れないんだ。ヨーロッパ支局に連絡を入れているが……」

「とにかく、早く記事にしてくれ。こちらは腰の重い連中だけで困っている。国はIPCCの予測一本槍で、海面急上昇についての『九鬼予測』を頭から無視している。これでは『東京沈下』の二の舞いとなりかねない。早くこの状況を変えなければ、どうにもしようがない。手も足も出ないのだ」

「大崩落が起きているのに……、お前たち、官僚は一度データを頭にたたき込まれるともうリセットすることはできないのか。石頭め。『茹で蛙』になっても気付かない連中だな」

「……………」

「海面急上昇すればどうなると思っっているんだ、この国は。なんでもいい、できることをやるほかないのだ」

受話器を叩き付ける音がした。

しばらくしてから、齊木は静かに受話器を返す。

15

狂った夏がはじまった。

日本列島に太平洋高気圧が張り出し、連日、三五度を超す日がつづく。ときには四〇度にも達する。都市では強烈な日射にビルや道路が熱せられてたつぷり熱を蓄え、夜間に放熱する。都市では夜になっても気温が下がることはないのだ。自動車やクーラーからの排熱がさらに拍車をかける。都心には巨大なヒートアイランドができた。

ヒートアイランドから立ち上る上昇気流が巨大な積乱雲をつぎつぎに生み出す。強烈な突風が吹き、屋根瓦や看板が飛び、窓ガラスが飛び散る。一時間に数十ミリを超える豪雨を降らす。マンホールから水が溢れて洪水を起し、道路が川となり、ビルや地下街が浸水する。家屋や公園が水浸しになり、畑の作物が水に浸り、腐れ出す。

連日猛暑がつづき、大雨と日照りが交互に襲うのだ。異常な天候が常態化した。台風の数が少なくなったものの、巨大化狂暴化した。

人びとは暑さにうんざりし、突風に驚き、大雨による洪水に戦慄した。

大雨のあとの洪水はなかなか引かず、水溜まりにはボウフラが湧き、マリアやテング熱などを媒介する蚊が群がる。道路端にはゴミが溢れ、濡れた畳や絨毯が放置され、あたり一面に腐敗臭が立ち込める。

洪水が去ると、ガラガラした強烈な陽射しに地面に張り付いた汚泥が乾

き、狂風に空高く舞い上がる。空一面真っ黒の雲に覆われ、やがて突風をともない大粒の黒い雨が落ちてくるのだ。

激しい雨足にバツタが飛びだし、蛙が飛びはねる。やがて、一面に水が溢れ出す。

気候異変とともに、海面急上昇が足音もなく静かに近づいていた。

16

「ああ……」

斉木は覆わず口をついて漏れた溜息に驚き、首を回して辺りを見回す。室内には誰もいなかった。斉木が課長席にいるときにはいつも席にいる課長補佐の白川の姿が珍しくなかった。

彼はふたたび窓の外に目を向ける。

眼下に広がっているはずの広大な関東平野が消え、海が迫っているのだ。

彼はもう一度深々と溜息をつく。

彼は前方に広がる海を眺めながら、日本列島から切り離されて海中に浮いていた首都圏島を思い浮かべた。その首都圏島はいまはなく、波立つ海が地平の彼方まで広がっている。

不意に、彼の脳裏に、海中へ投げ出されたときのことが断片的に浮かんだ。何度も海水を被りながら、必死に筏にしがみつき、ロープで身体を筏に縛りつけた。

彼は首都圏島がすると海中へ没していく様子を思い浮かべた。

突然、海の中へ沈んでいく首都圏島が悲鳴を上げたように感じた。いや、

それは首都圏島ともども海中へ没していった一八〇〇万人の断末魔の叫びだったに違いない。

首都圏島は海溝へ滑り落ちて、最後の足掻きのような巨大津波を発生させた。

だがこれで終りではなかった。

日本列島にはさらに海面急上昇が襲い、新たな地殻変動が呼び起こされるかもしれないのだ。そして……。

巨大津波に襲われた海岸が海面急上昇でふたたび海水を被ることになる。一度海水を被れば、海中に閉じ込められて二度と顔を出すことがないのだ。

首都圏をもぎ取られた日本列島が、こんどは海面急上昇で海岸線が侵食されていく。いたるところで領土が海中へ没し、痩せ細っていくのだ。痩せ細った列島に地震が噴火が相次ぎ、さらに痩せ細るのだ。痩せ細った列島はその果てに……。

彼はふと、首都圏島の沈没は日本列島の終りのはじまりだったのかと思っ

た。日本列島は地球温暖化の果てに消えてなくなるのか。一億人ものひとが住んでいる日本列島が、地球温暖化の果てに、本当になくなってしまおうだろうか。

世界第二位の経済力を誇ったかつての日本の姿はすでになかった。

中国やインド、ブラジルなどの新興国に追い上げられ、日本経済は順位を下げていた。そのうえ、東京沈下から首都圏島沈没にいたる大打撃を被り、没落の一端をたどり、往年の面影をすっかり失った。政治家や経済官僚らは日本経済を往年の姿に戻そうと金融緩和や内需喚起などの景気対策に躍起となるが、日本経済は完全に冷えきってしまったのか、回復の気配

すら見えなかった。

一度、心臓部を失った日本経済にとって、世界経済のなかでふたたびかつての地歩を取り戻すことは容易なことではないのだ。

巨大津波で太平洋沿岸の港湾施設が軒並み壊滅した。今度は海面急上昇で残っていた日本海沿岸の港湾設備が使用不能となって、日本の港湾が全滅するのだ。もはや、日本は海路による輸出入が不可能になり、外需依存の貿易国家日本はじわじわと首を絞められ、やがて息の根を完全に止められてしまうのか。すでに、外国への依存度の高い食料品の輸入が途絶えがちで、日本国民は飢えに曝されているではないか。

一方、世界では地球温暖化による気候変動で穀物生産の落ち込みが激しく、輸出穀物の不足が常態化している。世界的に穀物供給が逼迫する一方で、穀物が投機の対象にもなっています。値を上げ、価格が急騰していった。

国際価格の急騰は穀物だけではなかった。投機資金はエネルギーや鉱物資源にも流れ込み、つぎつぎに値を上げていく。このような強欲どものマネーゲームはこれからも何回も繰り返され、長い間つづくのだ。

このような状況で外需依存の輸出第一の国家経営は時代錯誤も甚だしい。ではどうすればいいのか。彼は自問自答を繰り返す。

「この辺で、日本の経営方針を見直し、大転換を図るべきじゃないのか。従来の路線では行き詰まる。いや、すでに行き詰まっているのだ」

「大災害で瀕死の状態にあるが……」

「だから、いいのだ。これで従来路線をきっぱりと諦めることもできるというものだ。瀕死の状態でなければ、未練が残り、なかなか見直す踏ん切りがつかないものだ」

「いまが改革の絶好のチャンスか」

首都圏島沈没後の巨大津波で何千万人の被災難民が各地へ押しかけていた。さらに海面急上昇によってそれに輪をかけた被災者が発生するのだ。

彼らが難民となって全国へ散っていくことになるのか。だが彼らは一体どこへ行けばいいのか。急上昇した海に臨海都市は吞まれ、農漁業や産業活動の場であった沿岸低地や平野を奪われ、痩せ細って山地ばかりとなった日本列島に彼らが生活し生存できる場所が残されているのか。

じわじわと上昇する海が住民たちを襲う。海に追われた住民たちは家を捨て、農地を捨てて逃げ惑う。毎日漁に出ていた舟は陸の上へ押し上げられ、転覆して腹を見せる。住まいを奪われ、食べものを強奪された住民はさらに押し寄せる海に後ずさりして高台へ逃れる。

だが海は容赦なく海面を上昇させ、住民にさらなる後ずさりを迫る。住民は高台や丘陵を探して右往左往し、少しでも高いところを探して登り、かつて捨てた限界集落地帯や山間部へと入っていくほかないのだ。

彼はふと、家族を思い浮かべた。首都圏島が沈没するまえ、久しぶりに家族のもとへ帰るつもりでいたのだ。

だが途中、白頭大人を訪ねたとき、首都圏島沈没の巻き込まれ、生死の淵を彷徨うことになったのだ。九死に一生をえて生き返った彼は、東京沈下と同時に家族のために引越したマンションを訪ねたが、家族の姿はなかった。妻は一人娘を連れて実家へ帰ったらしかった。彼はその日のうちに、白頭大人のもとに戻ったのだ。

何年かまえまで、世界有数の経済力を誇り、大量生産大量消費大量廃棄をつづけて、いたるところにゴミの山を築き、食べものの半分をも食べ残して廃棄してきた人びとが食べるものに事欠き、飢えに苦しみ、ゴミを漁り、

食べものを求めて各地を右往左往することになるのだ。

「ああ……」

彼は溜息を吐く。

17

「課長、仰木先生と連絡が取れましたが……」

斉木はしばらく課長補佐の白い顔をじつと見た。名は体を表すとはよく言ったものだ。半ば冗談交じりに思う。白い顔だから白川か、いや、白川だから顔も白いのか。

「おおき……」

斉木の無機質の声に反応したのか、白い顔に朱が混じる。

「評価委員会の仰木先生……」

いつも感情を抑え、なにを考えているか分からない黒ずんだ顔が浮かんだ。幹事役の仰木教授か、と言おうとしていると、すかさず、白川が言った。

彼は評価委員会の開催を指示したことを思い出したが、あの話はもうどうでもよかった。いまさらあの御用学者連中を集めてみても、なんの知恵も出てこまい。オーソライズを偽装してもらおう懸案もない。予算のムダ遣いになってしまっただけだ。

「うむ、あれは解散したのだったかね、それとも……」

「開店休業といったところですが……、もし新しい課題があれば、委員会を招集できると思いますが、全員が集まるか分かりませんが……」

白川は持って回った言い方をする。

「そうか……」

彼は探るように、回りくどい言い方をした白川の目を覗きながら、「……ところで、きみは海面急上昇についてどう思うかね」とつづけた。

「海面急上昇ですか……」

「そう、きみも夕刊の記事を見ていたようだが……」

「あれはIPCCの海面上昇予測と大分違いますね。政府としてはあれを取り上げるわけにはいきませんよ。なにしろ……」

IPCCの海面上昇予測は今世紀末で最大五九センチであるのに対して、九鬼の予測では今夏の終りまでに一〇メートルを超える海面急上昇が生ずるというのだ。両者はあまりにも違いすぎて、白川には問題外というところか。

「なんだね……」

彼はさきを促す。

「IPCCの報告書は政府間文書ですから」

「うむ、政府間文書か……」

白川が拘わっているのはその点か。

IPCCは国連に設けられた「気候変動に関する政府間パネル」の略で、ここで採択される報告書は科学者たちの執筆の段階から各国政府が関与して作成される、いわば各国政府お墨付きといったものであった。報告書は草案の段階で研究者と政府関係者で査読を繰り返したうえ、総会の全会一致で承認されて、ようやく各国政府間で合意した文書となるのだ。

「それに……、海面上昇は地球温暖化のマトアで、うちの所管外で……」

「海面急上昇で地殻変動が起こる……」

「でも、そのことについてはまだ……」

「おそれはある。おそれだけではダメか」

「……………」

白川は素早く、彼に鋭い一瞥を投げ掛ける。

「じゃ、諦めるか」

彼は白川の顔を見ながら、軽く言う。

「津波の被害で各省はてんでこ舞いなんです。海面急上昇が来るなんて言え、彼らを逆なですることになります。いまは取り上げないほうがいいと思います」

財政当局は復旧対策のための追加予算の財源確保に頭を痛めていたし、経済産業関係の部署では津波で壊滅的被害を受けた経済の建て直しのための産業界や各種業界との対応に追われていた。

太平洋ベルト地帯の臨海に立地していた工場プラントや発電所が津波に押し流されて破壊したり海水を被つたりしていたのだ。幸い無傷でも錆びつきだしており、再開するには塩分を洗い流し、くまなく点検しなければならぬ。

プラント配管が壊れ、原料や製品が漏れ出ているものがあつた。石油製品や原油が流出し、海水や海浜を汚染した。化学工場から毒性の強い化学合成物質が大量に流れ出し、付近の漁業に壊滅的被害をおよぼしていた。ことに養殖漁業は全滅の状態だつた。

太平洋岸の臨海発電所はすべて津波で海水を被つた。火力発電所では部品の交換やプラントの洗浄で済むが、原子力発電所はそうはいかなかった。破断した配管から流れ出した放射性物質を含む排水による放射能汚染が広範囲に広がり、魚介類の汚染や住民への影響が心配されたのだ。

「なにしろ、被害が広範で、酷い。復旧することさえ容易でない。だがこれらを復旧しなければ日本経済は回復しないし、日本国民を養つていけない。そこへ海面急上昇が来襲するから対策をしろといったところでなにもすることはできないでしょう。ここは黙って様子を見ていいと思いますか……」

彼は黙つたまま、しばらく部下のずる賢しそくに光る目を見ていた。

18

「きみはそんなことが可能だと思つていいのか。国内で調達できなければ、外国から輸入すればいいというが、いずれ各国とも食糧不足に直面し、穀物の輸出余力があるところはどこにもなくなる」

「そんなことはありません。いくら異常気象が頻発するからといって、世界中で食糧生産ができなくなつたりすることは考えられません。僅かでも食糧がある以上、金さえ積めば、手に入れることは造作もないことです。国に余裕があらうと無かろうと関係はない。問題となるのは価格だけですよ」

「高けりや、自国民を犠牲にしても外へ売り渡すというのか。このまえ、コメが不足して米価がつり上がったとき、米食のフィリピンなどで国外への売渡しを禁じたことがあつたではないか」

「あれは国内価格の上昇を抑えるためだつた」

「だがこれからは違う。海面急上昇すれば広範囲にわたつて農耕地が水没し、生産基盤の農地が喪失する。それに気候異変で日照りがつづけば水不



足となり、また気温上昇による高温障害で農作物の不作が常態化する。今後の人口増加を考えれば、一人当たりの世界の穀物生産量は大幅に減少する。絶対量が不足するんだ」

「価格が高騰すれば、買い手が少なくなり、手に入る量も増える」

「無理やり買い占めれば、買えない貧困層を飢餓に追いやることになる」

「弱肉強食の世界では仕方がないですよ。絶対量が不足していれば、ほかに打つ手がないんじゃないですか」

「そんなことはない。食糧を輸入に頼らず、自分が食べる分の食糧は自分で生産することだ。食糧に関しては自給自足を基本とすべきだ。もちろん、地産地消を第一にするのだ」

齊木はじつと白川を見る。彼は白頭大人を思い浮かべながら、以前の自分を思い返した。ふたりのポジションはいまの彼と白川とは全く逆だった。

かつての彼はいまの白川と同じ主張をしていたのだが、白川はいつのまにかかつての彼の立場に立っていた。

彼は課長補佐の白川とは議論を交わすことは滅多になかったが、白頭大人と交わした議論を振り返り、白川との議論を通して自分のいまの考えがどこまで耐えられるか、検証しようとして思っていたのだ。

「そんな、無茶な……」と言い、白川は彼の思いも頓着せず、一笑に付すように、「海面急上昇で農耕地が海の底に沈み、日本列島から農地が喪失してしまうのじゃなかったですか」と言い放つ。言外に、農地がないのにどうして食糧生産が可能なのかとおわせる。

「各国とも日本と同じような状況に置かれるのに、日本がいつまでも食糧を輸入できているの。外貨も底を突いたというじゃないのか」

「だからといって、いまず、一億もいる国民の食料を自給するといつて

もできるわけがないし……、だから外貨を得るためにも日本経済を早く回復させなければならぬのです」

「輸出で外貨を稼ごうとしても限度がある。外需に頼るのは外国経済に国の命を預けているようなものだ」

「そのような言い方ができるとすれば、自由貿易のもとでお互いがそれぞれの国が命を預けているのだから、それはそれでいいのでは……」

「自由貿易も当事者の力がおなじレベル同士であればいいが、この世界はそうではない。さまざまな力や能力をもつものが集まって競う世界だ。いわば弱肉強食の世界だよ。お互いが相手に命を預けているようなものといつても、比喩的に言えば、互いが素手で自由に貿易するならいいが、片方がピストルや機関銃を持ちしたら、どんなに力自慢でも素手では敵わない。」

この国際社会では、力のあるものが、ピストルや機関銃はおろか、核弾頭を仕込んだミサイルをちらつかせたり、悪知恵を働かせて、素手の相手を脅したりすかしたりしながら有利にことを運んでいるのが常態ではないのか」

「まさか、取引の世界では……」

「そう、一見すれば、商取引の世界では当事者は対等に見えるがね。それは見かけだけの話だ……」

金や才覚のあるものは投機で値をつり上げたり、ものを買い占めて売り惜しみ、高値を待って売り渡す。もつと悪知恵を働かせて、途上国の零細農民から土地を買い占めて大農園を経営し、労働力まで買いたたく。さらに、資本のあるものは会社組織で事業の巨大化を図り、巨大な力で取引相手を牛耳るのだ。自由主義経済といい、市場原理主義といい、そこには見かけの自由競争しかなく、すべてが強者に有利の働く仕組みにすぎなかつ

た。

「この世界で日本が生き残るにはとにかく強くならなければならないので。だから、日本経済を早く回復させなければ……」

白川が本音を漏らした。

結局、自由競争社会は自分だけがよければいいという世界なのだ。いや、強いものの自由競争であって、弱いものには最初から自由競争などありあしないのだ。勝ち負けは最初から決まっているのに、負けても恨みつこなし、負けたら消えいくのみの世界だ。ことに日本では鉄や電力などの大企業が政治家や官僚を動かして、有利にことを運ぼうとする行動パターンが支配している。

「日本は以前と同じような経済力を取り戻すことができるだろうか。日本はこの際、いままでと違った方向をめざすべきではないのか。従来のタイプとは違った……」

日本は首都圏を喪失し、太平洋沿岸の都市や工業地帯も壊滅的な状態だ。かつての経済力は半減してしまった。

これを回復するためにはインフラの整備からはじめなければならない。だが道路や港湾などのインフラへの投資はいくらかけても生産力の向上には直接結び付かないのだ。日本経済の回復は一朝一夕にはいかない。

環境への負荷をかけ、エネルギーを多消費する従来タイプの産業構造は時代遅れだ。それに地球温暖化などの地球環境問題で満身創痍の状態にある地球環境にこれ以上の負荷をかけることを繰り返すようなことは、先進国がすべきことではないのだ。先進国なら環境負荷の少ない新しい産業構造を追求すべきだ。いまさら、日本が従来型の産業構造へ引き返すことはないのだ。

「そうできればいいでしょうが……」

白川は自分の立場に気付いたのか、言葉を濁す。

「海面急上昇で一〇メートル海水面が上がれば、道路や港湾などのインフラをはじめからやり直さなければならないだろうし、これらの整備が終わるまでは当分の間、臨海型工場立地は不可能となる。また、その間、海外から鉱石や原油などの原材料の輸入もできない。だが海面上昇が一〇メートルで済むかどうかわからない。南極大陸の氷床が残っている。地球温暖化が収まらないかぎり、氷床の融解や滑落がつづく。海面上昇はまさにエンドレスの現象のようにまだまだつづくことになる……」

「一体、何メートルまで上昇するのですか」

「南極大陸の氷床が全部融ければ、一〇〇メートル以上上昇するそうだ」

「じゃ、海岸が後退に後退をつづけることになるのですか。それまでは……」

白川は口を開けたまま、声が出ない。

「海面上昇は極めて分かりやすい現象だ。これにともないこのほか、今後、なにが起こるか分からない。われわれは巨大地震で振り回されているが、これも比較的分かりやすい現象だ。分かりやすい現象が相手なら、対策も遣りやすいはずだ。海面上昇は必ず発生するのだよ。それをなぜ無視しようとするのか。先のことは分からないと、なぜ暢気に構えることができるんだらうね」

彼は執務机から立ち上がると、窓辺に近づき、遠くに連なる山並みに目をやった。

「斉木か、今日の夕刊で海面急上昇を取り上げることになった……」

佐藤だった。

「随分、ゆつくりしていたな。なにかあったのか」

彼が再度海面急上昇を取り上げてほしいと言っただけから、一週間過ぎていた。そのとき、グリーンランド氷床の大崩落による大波がヨーロッパ大陸に押し寄せたと言っていたが、それきり連絡がなかった。その間、彼は関係市町村へ海面急上昇対策の実施要請を出すべきだと関係省庁へ働き掛けていたものの、なんら反応はなく、自分自身の無力さに苛々が募る毎日を通っていた。

「実は、あれ以来、氷床の崩落や滑落現象が国際的に注目され、IPCCで海面上昇予測の見直し作業がはじまった」

佐藤は国連のもとに国際海面上昇監視センターが設立されることになりそうだという。グリーンランドと南極大陸の氷床監視が常時なされ、氷床の崩落・滑落情報が世界へ発信されることになる。それに基づき、全世界に向けて海面急上昇警報が発せられるのだ。

「そんなことで間に合うのか。夏の終りまでに残り二か月ほどだが……」

九鬼はこの夏の終りまでにグリーンランド氷床が大崩壊を起し、海へ滑落すると予測していた。

「とにかく、今回の動きはヨーロッパ大陸を襲った例の大波騒ぎが発端だが、そのときは最大海面上昇が三〇数センチだった。思ったほどでなかったのか、こんなふうになったということだ。ドクター九鬼は強弁に反対していたようだが……」

「じゃ、対策もお手上げだな。なにしろ、政府の地球温暖化対策ベースはIPCC予測だから、九鬼予測には見向きもしない」

「明日にも海面急上昇が襲うのにな」

「首都圏島沈没があったばかりなのに反省が全然ないんだな」

「他人事みたいな言い方をするな。事大主義権威主義的行動はこの国の官僚のお家芸じゃないのか。彼らには日本の将来よりも自分の保身が先なんだだろう。だがそれは官僚だけじゃないな。企業でも同様だ。いや、人間はすべてそうかもしれないな」

「そんなこと言っていていいのか。なんとかしなければ、首都圏島の二の舞いだ。このままでは一億人総難民化が待っているだけだ。とにかく、家族ともども家財を持って一刻も早く沿岸から避難するほかないかもしれないが……」

「早く避難警報を出すべきだ」

「関係部署に働き掛けているのだが、さっぱり動こうとしない……」

「代わって、お前の名前で、全国の沿岸市町村へ海面急上昇警報を出せばいいではないか」

「それは……」

「何を言うか。緊急避難だ。かまわん」

「権限を超えて行動はできない」

「『権限』がないというのか。お前たちは無責任集団なのか。台風の進路予報でも『河川の増水に気をつけて』『山崩れの恐れがある』とか言っているじゃないか。なぜ、海面急上昇でそう言えないのか」

「権限のことは別にしても、海面上昇警報発令に関する根拠の法律がない」「バカ言え。緊急時にそんなことを言っておれるのか。とにかく、早く避

難警報を発するのだ。予測の見直しを待っていては間に合わないかもしれないんだぞ」

「空振りだったら、誰が責任を負うのか」

「住民の安全が第一だろ。海面上昇は時間の問題で、遅かれ早かれ必ず起こることなのだから、そんな心配は不要だ」

「そうはいかない……」

「今日の夕刊で警告的な情報を発信しているが、中央官庁レベルのオーソライズがないと市町村は動くことはないだろう。海面急上昇がはじまっているのに、なんら手を打とうとしないなんて考えられない。行政の怠慢だぞ。住民を見殺しにする気か」

「官僚機構にはそういうところもあるんだ」

「なにを偉そうなことを言っているんだ。そんな官僚なら止めてしまえ。お前は首都圏島沈没で二〇〇〇万人近くの人びとを見殺しにしたことを忘れてしまったのか。家族を見すててまで、白頭大人に付いていったのは単に逃避しなかったからだけだったのか。これまでの官僚のいき方に愛想をつかしたからではなかったのか。お前は職を賭してまで列島住民を救おうとしないのか……」

佐藤は檄をとばす。自分たちだけが新庁舎で悠然と過している官僚たちを見ていると、むらむらと怒りが突いて出るのだった。

首都圏島沈没後、先が読めず、官僚の多くは前例主義に凝り固まり漫然と従来の仕事を繰り返していた。マネー中心の考えが蔓延るなか、官僚無誤謬原則のもとで自己中心の功利的考え方が幅を利かせ、官僚機構はますます硬直化していった。官僚たちは国益よりも省益を優先し、もっぱら保身に明け暮れていた。

「……………」

「この国では民主主義は名ばかりで、官僚は実質的に国政を牛耳っているのに、彼らにはその自覚がない。いま、地球で、世界で、日本でなにが起きているか関心がない。行政は縦割り細分化され、個々の官僚は極端に細分化された仕事を繰り返すだけで、全体を見ることがない。縦割りに細分化されたまま、横への繋がりを欠き、全体が見えないのである。だが海面上昇にしろ、地球温暖化にしろ、各種の災害は縦割り行政を超えた全体的な事象だ。お前さんが『権限がない』と言うのも分かるが、それは官僚組織の無能を告白しているようなものだ。土台、官僚組織や行政機構には全体的思考は向かない。いや、これらばかりではない。現代社会がそうだ。

現代文明そのものが縦割りの細分化を増長している。だから、海面上昇といった人為的自然的災害にうまく対応できないのじゃないか。今後、日本列島に限らず、全世界をさまざまな大災害が襲うだろう。それらの多くは人類の存続にかかわるほどの巨大な災害をもたらすものにちがいない。対処方法を一步誤れば、人類を絶滅の淵へ追いやることになるのだ。今回の海面急上昇も対応を誤れば、日本はもちろん、世界の多くの国も滅亡の危機を迎えるにちがいない。そのとき、官僚はどう行動するのか。首都圏島沈没から一体どのような教訓を学んだのだ……」

受話器を通して、佐藤の抑制された声がつづく。彼は受話器を耳に押し付けたまま、窓の外の光景に目を向ける。遠くに山脈が幾重にも連なる景色が広がる。

彼は一瞬、目のまえの光景が消えていくように感じた。

齊木は気が気でなかった。

毎日があつという間に過ぎて、夏の終りが近づいていく。海面急上昇を目の前にして、彼は自分の無力感に打ち拉がれていった。彼は次第に声を潜め、囁くように話すようになっていた。

目を開いているのに、なにも見ていなかった。彼にはなにも見えなかったから、海面急上昇の唯一の対策は家財を持って一刻も早く沿岸から高台へ避難するほかないなどと言ってしまったのだ。

命があれば、あとはなんとかなるといえるのか。海岸の砂浜や沿岸低地は海に吞まれ、山地や森林だけの痩せ細った日本列島で一億人がどうやって生きていくのか。

彼は避難民で超満員に膨れ上がった高台を思い浮かべ、漸く、官僚の習性で前例にしたがいその場限りの仕事しかしてこなかったことに気付いた。だから海面急上昇に際しても、高台への避難といった一時しのぎの対策しか思いつかないのだ。

彼は佐藤から言われるまで、日本や住民の将来について真剣に考えてこなかったことに気付いた。彼はこれまで上司の顔を窺い、省益第一にそこそこに仕事しておれば、先輩と同様に、定年を迎えて天下りし、三箇所ぐらい「渡り」を繰り返えすことができるだろうと思っていたのだ。

それが東京沈下あたりからおかしくなった。首都圏島沈没で決定的になった。

あの日、佐藤のヘリコプターに同乗して、敵前逃亡を企て、家族のもとへ帰る途中、なぜか突然、白頭大人に会いにいく気になったのだ。

それから、復職命令が出て仕事にもどるまで、白頭大人と行動を共にするようになっていたのだ。

白頭大人の農園を思い浮かべた。農園の風景が浮かんだ。首都圏島沈没で九死に一生を得た彼には農園が唯一のこころ安まる場所だった。日本全土に農園を広め、みんなが和気あいあい暮らす世界を築けないかと思つた。

だがこれは一朝一夕にはいかない。それに関東平野（首都圏）を失い。太平洋沿岸一帯が巨大津波に襲われ、さらに、近々、海面急上昇で日本列島の沿岸部の低地が水没してしまう。これで沿岸部の都市や集落に住んでいる数千万人の住民が一挙に住み処を失い、難民化し、全国を彷徨うことになるのだ。

数千万人の彷徨える難民を抱え、痩せ細った日本列島で一億人がどうやって生きていくのか。農園建設の時間はないし、たとえ時間があつても果たして痩せ細る日本列島に農園適地はどれほど残っているか。

彼はもう一度白頭大人の話を思い返す。農園思想のキーワードは自給自足だった。食料の自給はもちろん、エネルギーなど自給可能なものはすべて自給しようとするのだ。彼は自給自足の考えの奥にひそむ基本の考えを探っていく。

地球温暖化による気候変動で頻発する異常気象の影響をモロの被り、農作物の生産量は世界的に落ち込んでいた。ことに穀物の減収が著しい。農園思想の自給自足は飢餓への備えなのか。

有限な地球における自給自足可能容量は無限ではない。それは環境容量に依存するのだ。有限な地球においては、地球環境の自給自足可能容量限度の人口が地球環境の生存可能な人口であり、これが適正生存可能人口な

のだ。

しかるに、世界人口は爆発的に増え続けてきた。すでに限度を超えてしまっている。

地球の適正人口を維持するために厳守すべきは、環境容量の限度内での自給自足なのだ。自給自足可能容量は対象環境の規模によるが、グローバル化した地球ではこれが地球全域におよんでいる。

現代文明は地球環境の有限性を無視して果てしなく巨大化高度化大量化を図り、グローバル化を押し進め、対象環境を地球全域に拡大して地球上の資源を大量に浪費し、地球環境を破壊してきた。大量生産大量消費大量廃棄システムを通して地球上の各地へ大量の物資やエネルギーを運び込んで地域住民に自給自足を放棄させ、大量消費を促し、いたるところにゴミの山を築いていった。

われわれ現代人は現代文明を通していわば農園思想の地産地消を基本とする自給自足とは逆のことを地球上で展開してきた。そして地球温暖化などの地球環境問題を激化させることになった。

地球環境容量を無視して人口過密空間である巨大都市をつくりだしたこと自体が、農園思想が基本とする地産地消型自給自足を放棄させ、大量生産大量消費大量廃棄システムに依存することだったのだ。いや、大量生産大量消費大量廃棄システムを成立させ、資本主義経済を成長させるために、ムダな巨大需要を醸し出す巨大都市をつくる必要があったのだ。

巨大都市は金食い虫の浪費システムにほかならない。毎日、大量の水を消費し、大量のエネルギーを必要とし、大量の食料を食い散らかす。無数の情報が飛び交い、莫大な金のやり取りが行なわれる。これらの物資やエネルギーは広くかき集められて遠くから運ばれてくるのだ。それに世界中

との情報のやり取りや金の決済が絶え間なくつづく。

その都度、大気や水は汚染され、騒音や電磁波が辺り一面に広がる。都市住民は我慢を強いられ、耐えられない住民は都市生活を捨てるほかない。

現代文明を謳歌したければ、現代文明が内蔵する危険をも受け入れるほかないのだ。現代文明は巨大化高度化大量化に依拠してリスクをも巨大化高度化大量化している。ある日、全人類を奈落に底に突き落とすような、巨大化高度化大量化したリスクが目に見えないかたちで広がり、全世界を覆い尽くしているのだ。

大量殺戮兵器である核兵器や生物・化学兵器の類いはある程度管理可能であるが、地球温暖化などの地球環境問題による地球システムの攪乱はもはや人間によるコントロールが全く不可能である。

現代人は巨大化高度化大量化した現代文明を駆使して人間活動を地球全域に拡大し、都市建設、資源・エネルギー開発、森林伐採、農地開拓、工場立地などを行い、生産消費を広げていった。だが巨大化高度化大量化した人間活動は地球環境問題を噴出させ、ついに地球システムを攪乱してしまつたのだ。

彼はこれまで日本列島を襲つた大災害を思い浮かべる。熱水塊に取り囲まれた日本列島、焦熱地獄と化した日本列島、狂風大雨の震える日本列島、飢餓疫病が蔓延する日本列島、そして首都圏が海中深く沈没していった日本列島……、これにどんな大災害がつづくのだろうか。

一端、地球システムが攪乱をはじめた以上、今後とも、日本列島を襲つたようなさまざまな大災害が世界各地を襲うことだろう。

地球システムの攪乱によって、世界は大災害時代に入ったのだ。日本列島もさまざまな大災害に悩まされつづけることになるだろう。

とすれば、これから日本列島を襲うであろう大災害を先取りして、それらに耐える日本をつくることだ。

迫り来る海面急上昇の対策としての高台への避難は一時しのぎに過ぎない。海面上昇で土地が海中に呑みこまれ、その都度、さらに高いところへ後退を繰り返すような避難対策はムダなことだ。温暖化がつづくかぎり、海面上昇はつづくのだ。

地球システムの攪乱がつづくかぎり生起する大災害に備えるには日本をどうすべきか。世界は……。彼は官僚であることを忘れ、省益を離れ、必死に考える。

地球システム攪乱の原因はなにか。その原因となった地球温暖化を止めるにはどうすればいいのか。地球温暖化のほかの地球環境問題はどうか。地球環境問題を噴出させた現代文明の限度を超えた巨大化高度化大量化と大量生産大量消費大量廃棄システムによる地球資源の搾取・浪費と地球環境の破壊……。

現代文明は自己目的化して巨大化高度化大量化の道がむしやりに辿つていったのだ。自己目的化した文明にはプラスのみを選別し、マイナスを排除する力はなかった。現代文明はプラスを極大化すると同時にマイナスをも極大化してしまった。

彼は漸く、極度の巨大化高度化大量化から巨大な怪物と化した現代文明の問題性に気付いた。ではどうするのだ。どうすればいいのか。自問自答を繰り返す。

白頭大人が姿を現わし、農園風景が浮かんだ。

自給自足型農園は自力救済を目指す新しい文明のひとつのモデルだったのだ。

自給自足か。暴力的な野蛮な現代文明に代わるべき新しい高度な文明は自動的にマイナスを処理してリスクを最小化する文明ではないのか。文明は人間の所産である以上、新しい文明を築くには新しい理念に基づく新しい行動原理を確立しなければならないのだ。リスク最小化がその理念ではないのか。

彼は漸く、ひとつの結論にたどり着いた。だがその方法は……。まだまだ模索はつづく。

## 第三章

21

「おい、浜が狭くなったようだが……」

「海が広くなったんじゃないのか」

「そういうことか……」

二人の若者が砂浜で甲羅干しをしている。ひとりは痩せてぎすぎすで背が高く、もう一人は背が低く丸い感じだ。

土用波が立つようになって、めっきり海水浴客が減った。逆に、サーフィンを楽しむ若者の姿が目立つ。

全国的に昨年よりも海浜の砂浜が狭くなっていた。海面がじわじわと上昇して海が陸地へ浸入しているのだ。

「一週まえに来たときよりも狭くなったようだ……」

「そろそろ満ちてきているんじゃないのか」

「まだ、早すぎる。それに波の立ち方も違ってきたようだし、流れも変わってきている感じだ……」

「もう一度、波乗りしてくるか」

日焼けした背の低い若者が立ち上がる。

もう一人の長身の男は身を起したものの、海を見つめたまま、砂浜に座り込んで動こうとしない。

前面に広がる海は中央が凸レンズのように盛り上がり、両端が沈み込んで大きな球面の一部を形どる。

長身の男は海の地平が描く長い弧を見ると、いつも地球が球体であることを実感させられるのだった。だが今日は海が妙に間近に迫って見える。波の立ち方もいつもと違う。なにかが違っている。彼はじっと海を見つめた。

端の方に見える原子力発電所の建屋が目障りだった。

彼はふと、海水が妙に軽く生温かったことを思い出した。熱帯域で降った大雨が混じることなく、灼熱の陽光を受けながら黒潮の表面に乗って流れているのか。それともマグマが上昇し、海底から熱水が吹き出しているのか。彼にはなにか得体のしれないことが起る前兆のような気がしてならなかった。

「おい、帰ろう。海が怒っているのか、笑っているのか分からない」

「うん、いつもと違うな。どこかで地震があったのか」

津波が押し寄せてきている感じがするのだという。それも陸へ向って一方方向に流れている感じなのだ。

燦々と射していた強烈な陽光が消えた。いつの間にか厚い雲が空を覆っていた。風が出て白い波頭が立ち、激しく波飛沫が飛ぶ。

海が迫ってくる。二人は海に追われるように腰を上げ、後ずさる。海が押し寄せる。二人は立ちつくす。

「なんだ。満ち潮か。いや、違うな……」

棒立ちになった二人の足元が濡れ、足の周りの砂が逃げ、砂の中にめり込んでいく。

二人は砂丘を目指して駆けて行った。



「佐藤くん、グリーンランド氷床で大崩落の連鎖がはじまる。大滑落だ」  
九鬼だった。

「ホントですか……」

佐藤は受話器を耳に押し付ける。

「近々、センサーも警報を出すことだろう。きみのところでも衛星映像を見ることができるとはいいな。氷床に大きな陥没が生じている」

国連に設置された国際海面上昇監視センターのことか。監視センターはグリーンランドや南極の上空に監視衛星を打ち上げて常時監視を実施しているのだ。映像データは各国関係機関へオンラインで送られていた。

「やはりそうでしたか……」

海面急上昇がやってくるというのか。これまで崩落現象は何度もあったが、警報は一度もなかった。各国の政府もマスコミも取り上げることもなく、日本でもあまり関心がなかった。

とにかく、地球温暖化など地球規模の環境問題に対しては行政の動きが相変わらず鈍く、斉木がいくら声を上げても、全国規模の海面急上昇対策はいまだ手付かずの状態だった。

彼は受話器を耳に強く押しつけて、九鬼の言葉を待った。だが受話器の奥から聞こえるのはパソコンのキーを打つ音だけだった。

彼が受話器を耳から離そうとしたとき、ようやく九鬼の声がした。

「日本の沿岸で海面が急上昇するのは、多分、明朝以降になるだろう」

「日本時間ですね。それでどの程度の……」

「崩落の規模によるが、今回は最大五、六〇センチから一メートルかな」

「そんな大規模の崩落だったのですか……」

「現地のモニターからのデータと監視衛星の映像から推測すると、この程度の崩落は今後連鎖して何回も起こると考えられる。海面が急上昇する……」

九鬼によると、こうだ。グリーンランド氷床にはところどころに大小の穴が無数にできているが、さらに穴の数も増え、穴も次第に大きくなってきている。穴の周囲には亀裂が走り、そこを伝って氷の融解水が氷床の下へ溜かへ流れ込んでいる。これまでは方々から流れ込む融解水が氷床の下へ溜まり、そこから漏れて岩盤へ落ち、氷床と岩盤の間を通って海へ流れていると思われていた。だが最近の調査ではグリーンランドの盆地や氷床の重みでできた岩盤の窪みにいくつもの巨大な湖ができているという。今回はそのなかのひとつで巨大湖の上を覆う氷床の一部が大崩落を起したのだ。巨大湖の湖水が溢れて流れ出し、上部の氷床を押し上げたらしく、浮き上がった氷床が滑り易くなつて動き出し、これにともない氷床の崩落が相次ぎ、大滑落が生じたというのだ。

「とすれば、いずれグリーンランドの氷床が四方八方へ北極海へ滑り落ちるといことですか……」

「今回は南東部だったが、今後、島のいたるところで起こるといい。なにしろ、大小の地下湖は溢れた水で連なつて日本列島並みの大きさになっているからな。いや、もつと大きくなっているかもしれない。これまで南東部の海岸では大崩落がつづいていたが、この海岸付近にはいくつか標高の高い岩峰が露出しているので、大規模な崩落が連続して生じにくいと思われていた。ところが今回ここで発生したのだ。いずれ、全島のいたるところで大規模の崩落現象が起こるにちがいない。もう一つ心配なことは、

北極海の地盤が盛り上がり出していているらしいのだ。これで大崩落が連続すれば、確実に大滑落がつづく。人びとを海岸辺りから早く避難させることだ」

彼は受話器を返すと、走り出した。

23

「こりやなんだ……」

日焼けした白髪の小男が飛び起きた。砂浜に直に敷いて寝ていたむしろがいつの間にか濡れていた。

老漁夫は暑くて寝苦しい夜には夏場の仮舟小屋近くの砂浜にむしろを直に敷いて、横になる。どうせ夜明け前に舟を出すのだ。一人だけで浜から離れた母屋で寝るより、舟小屋のそばに寝れば、すぐ漁に出ることができ

る。

その日もそうだった。ウインチで砂浜に引き揚げておいたはずの舟が波間に浮いている。砂丘のなかほどにある舟小屋に海が迫っていた。

七〇年の間、こんなことは一度も見ることがなかった。大潮か。だが大潮のときもここまで海水がくることはなかった。

海水は舟小屋に迫り、老漁夫の足元を濡らしはじめた。老漁夫は海水のなかに立ち尽くし、白み出した海に目をやり、じつと潮が退くのを待った。いくら待っても潮は退くことがなかった。ますます満ちてくるようだった。砂浜を呑み尽くしていく。小舟は砂丘の中腹に押し上げられ、やがて

転覆して舟底を見せた。

ここまゝ島が海に呑まれてしまうのではないかと思った。いや、もしかしたら、島が沈み出しているのかもしれない。老漁夫は恐怖を覚え、急いで踵を返し、砂丘の頂きに向かった。

日本海にある小さな島にはつい最近まで五〇世帯ほど住んでいたが、小学校の分校が閉鎖されてから急速に寂れ、いまでは年寄りだけの五世帯が残っているだけだった。かつて漁港として栄えた唯一の小さな港に通じるメインストリートには日用品や食料品を扱う店が連なり、飲食店や呑み屋もあつて賑わっていた。だがいまは、いずれも閉ざされ、空店舗や空家が並んでいるだけだ。

老漁夫は砂丘を越えて、高台の人家を目指す。振り返ると、週一回食料や燃料などの必需品を運んでくる定期便船が着く棧橋は海に呑まれ、メインストリートにも水が溢れていた。

老漁夫は何度も海を振り返りながら、せかせかと坂道を上っていく。

「起きているか、海が……」

老漁夫は一軒目の戸口で声をかけ、つぎの家に向かう。後ろで声がする。

老漁夫は海の方を指差し、先を急ぐ。

ようやく、五軒目にたどり着いて、老漁夫は海を振り返る。

「なんじゃ、こりやあ……」

海が目の前に迫っていた。老漁夫は腰を抜かし、へたへたと地面に座り込んでしまった。息が急に苦しくなった。目の前が真っ暗になった。意識が遠のいていく。

老漁夫は遠のいていく意識のなかで、燦々と射す陽光にきらきらと輝く波間に漂う小舟で釣り糸を垂れている自分の姿を見ていた。すぐそばに笑

みを浮かべ、懐かし気に見つめている亡き老妻の柔らかい目があった。

24

「グリーンランド氷床が……」

佐藤はデスクに声をかけ、会議室へ走る。新築の本社ビルではすべての会議室にスクリーンが設置されており、地球衛星などからの映像を受信することができた。

彼はドアを開けると、中央のテーブルの片隅で打ち合わせをしている三人の社員の姿が目に入ったが、「緊急事態だ」と告げ、壁のスイッチを押した。スクリーンを開く。後ろから頭のはげた小太りの男が追ってきた。

「グリーンランドがどうした……」

デスクの科学部次長だ。

「次長、氷床が大崩落を起したらしい……、海面急上昇が……」

彼はグリーンランド監視衛星にチャンネルを合わせる。

スクリーン一杯に白く光るグリーンランドが現れた。南部や南東部の海岸辺りに緑の草原や剥き出した岩盤があった。高く聳える岩峰が氷床から突き出ている。

グリーンランドは日本列島の約六倍の広さがある。九鬼が言っていた氷床が大陥没を起した巨大地下湖はどこにあるのか。

彼はグリーンランドを南海岸から北上していく。青白い氷床に黒く見える斑点が無数にあった。これが「ムーラン」と呼ばれている氷の融解水が流れ込んでいく穴にちがいない。ズームアップして、陥没跡を探す。

「あ、これか……」

中央から南よりのところに四方八方から穴の周りに向かって亀裂が走る大きな陥没跡があった。

「亀裂が……」

さらにズームアップしていく。よく見ると、亀裂が海岸まで走っており、次第に広がっていくようだ。滑落がはじまっているのか。四方八方に走る無数の亀裂のなかには西海岸から東海岸まで一直線に繋がっているものもあって、グリーンランドを完全に横断しているようにも見える。氷床の下にあるらしい地下湖はどうなっているのか。湖面に崩落した氷床塊で湖水が溢れだし、氷床と岩盤の間を流れ出してしまったのか。氷床の下に溢れた水が氷床を道連れに海へ流れ出すのだろうか。それとも水位の上があった地下湖の湖水は氷床を持ち上げ、一挙に氷床を海へ押し出すのだろうか。

「グリーンランドの面積が日本列島の六倍とすると、亀裂の走った氷床の面積は優に日本列島の二、三倍はありそうだ。これが海へ滑落すれば、海面は数メートルかそれ以上急上昇するにちがいない」

彼は呟く。隣で次長がスクリーンを凝視している。

「亀裂が海岸まで走っているところをみると、地下湖をつくっている自然の堤防がすでに決壊しているのかもしれないな……」

「……………」

「おい、おい……、海面急上昇がはじまっているというのか」

亀裂の黒い口が見る間に広がっていく。

「そういえば、近々、センターから警報が出されるだろうといっていたけど、まだだったのか……」

「なんだって……、国はなにをしているのだ」

デスクは走って会議室を出ていく。

佐藤はじつとスクリーンに写し出された亀裂に目を据えていた。無数の亀裂が走る氷床の上にひと際大きな亀裂が口を開け、暗い空間を覗かせている。水の融解水が暗い空間へ流れ込んでいるのか、周りの氷床の崩落か、それとも亀裂の南側の氷床が海へ向かって滑落しているのか、亀裂の幅が次第に広がっているように見える。

海岸へ焦点を転じると、海にせり出た氷床の崩落がつづいていた。海岸に沿って白い帯ができていく。氷床が崩れ落ちて海面から飛び上がる飛沫が白く輝いているのだ。

「グリーンランドの氷床が全部海へ落ちてしまうのだろうか」

「全部落ちたらどうなるのだ。海面が急上昇することになるのか」

「海面急上昇？」

「海面急上昇はいつ日本列島を襲うのか……」

いつの間にか、彼の周りに人垣ができていた。

彼は振り返り、「グリーンランドの氷床はいずれすべて海へ落ちていくでしょう。これで海面は一〇メートル以上急上昇することになるだろうが、現在滑落のおそれのある氷床は一部で、これが滑落すれば一メートルを超える海面急上昇が生じることになるでしょう。それは明朝、日本列島を襲うかもしれない」と人垣に向かって口早に言い、その場を離れた。

25

海面上昇監視センターから世界に向けて、海面急上昇警報が出された。

わが国の反応は鈍かった。政府に特段の動きはなかった。テレビなど、マスコミを通して警報が流されたが、地震津波や台風時の高波に対する警報と同じ扱いだった。

住民たちは地震津波や台風時の高波に対する警報には慣れていても、海面急上昇警報は初耳だった。

「明朝から夕方にかけて一メートル前後海面が急上昇するおそれがあります。海岸から離れて、高台へ避難して下さい」

受け取り方もまちまちだった。巨大津波を体験した太平洋沿岸と未体験の日本海沿岸とは反応がちがった。太平洋沿岸でも「一メートル前後」に対する反応のちがいがあつた。一メートル前後の上昇でも危険と感じた住民は高台へ避難したが、多くの住民が避難せずに、自宅で朝を迎えようとしたのだつた。

これに「明朝から夕方に……」にも判断が分かれた。というより、自分に都合よく解釈する傾向があつたのだ。

結果的に、政府や行政も、また住民や企業なども海面急上昇に対する心構えも備えもなかった。誰も海面が急に上昇することをイメージすることができなかったのだ。

26

「おい、起きろ」

真夜中の喧嘩も去って、漸く寝入ったばかりだった。ホームレスで路上生活をつづけている中年の男は身を起こしたものの、御影石を張ったビル

の壁に背を押し付け、眠りつづけている。

「おい、早くしろ」

隣で寝ていた年かさの男だった。

中年男は年かさの男を見上げた。

「それ、見ろ」

年かさの男は顎をしゃくり上げた。その方へ目を向けると、道路一面に水が溢れているではないか。

「浸水か……」

水道管破裂か、大雨の洪水か、堤防の決壊か……、中年男は立ち上がり、思い当たるものを思い出し、辺りを見回す。

いつの間にか、足元が濡れている。

「なんだ、これは……」

「早く逃げろ、海が追いかけてくる」

年かさの男は紙袋の荷物をもって走り出した。

「どうしたんだ、浸水している」

カーテンをあけると、前面の空地に水が溢れている。巨大津波に襲われ、ゼロメートル地帯一帯の戸建ての住宅が押し流されてできた空地だった。コンクリートのマンションだけがどうにか残っているだけで、前面一面に空地が広がっていた。

パンツ一枚の若い男がベランダのガラス戸を全開すると、潮の匂いがした。

「どうしたの……」

うしろで伸びをしながら、パジャマの上着を羽織った若い女が男の肩ご

しに覗く。

「まあ、またなの」

共稼ぎの若夫婦がマンションを買ったばかりとき、津波に襲われた。幸い、マンションは残った。五階の部屋は殆ど被害を受けなかったが、エントランスホールは砂に埋まり、津波に襲われた二階、三階ではベランダのガラス戸や窓ガラスが破壊され、ドアや窓枠も奪われて家具も流されてしまった。

一時はライフラインが止り、水も電気もない暗闇の不便な生活を余儀なくされたが、避難先のない若いふたりは半身不随のマンションに居座るほかなかった。

ようやく、上水道と電気が戻り、津波で破壊された防潮堤の修理も済み、浸水の恐れも解消したばかりだった。

「停電だ。水もすぐ出なくなるぞ」

ふたりは風呂場へ走り、タブに水を張り、バケツやポリタンクに水を溜める。栓から流れ出る水の勢いが弱まっていく。屋上タンクの水が無くなったのが、水が濁り出した。電気が止まれば、汲み上げることができなくなるのだ。

「もう、空だ」

男は妻の顔を振りかえり、大きく息を吐く。

「水はすぐ引くんでしょうね」

ポリタンクの蓋を閉めていた妻が呟く。

ふたりはベランダに戻る。手すりに身を寄せ、下を覗く。

「さつきより増えてきたようだ」

「え？ そんなこと……」

「この水はどこからきたんだ。防潮堤は修理したばかりだろ」

人が集まり出した。エントランスまえの広場にほうきやバケツをもった人びとが集まって話をはじめている。

ふたりはベランダから下の動きを見守る。ひとり去り、ふたりが去って、やがてひとの姿が消えた。

それにしてもゼロメートル地帯とはいえ、なぜ防潮堤に囲まれた地帯が水浸しになったのか。一晩のうちに、予想を遥かに超えて、海面が急上昇したのか。

防潮堤の点検が行われた。市の担当者は修理したところをくまなくチェックしていく。だがどこにも決壊したところは見当たらなかった。

満潮時に防潮堤を海水がオーバーフローしたとでもいうのだろうか。だが防潮堤にも海水が流れ込んだ跡はなかった。

点検中、担当者は奇妙なことを耳にした。

「海水が河を上ってきた……」

「河川が逆流した……」

「海水が鎌首を立てて上流を目指して進んでいった……」

「満潮時に潮位が著しく高まった……」

「堤防から水が溢れていた……」

「マンホールから水が噴き出した……」

河川や排水口に設置されている水門は開いたままだったし、このゼロメートル地帯を抱える大都市には中心部を縦断するように、大きな中州のある勾配の緩やかな大きな河川が流れていた。この都市の真ん中を流れている河川の堤防が上流へ行くに従い低くなっていったのだ。

上流の堤防から溢れて浸入した海水はゼロメートル地帯を水浸しにし、やがてデルタ地帯に築かれた都市の中心部一帯に広がっていった。

海水は都市の地下に広がる地下街や地下施設を襲った。地下鉄のトンネルが水路となって一瞬のうちに海水が広がっていく。繁華街の地下に張り巡らされた地下通路や地下鉄は水のなかに沈み、ビルの地下階は軒並み水浸しになって、電源が落ち、設置されていた各種装置や機械類が止まってしまう。電気が途絶え、ライフラインや交通通信ネットワークが機能不全の陥った。高層ビルはただの巨大な箱と化し、都市は息絶え絶えになって、やがて死んでいく。

人びとは右往左往し、水のなかに取り残された。

交通機関は運行不能で運休となった。ビジネスマンたちはオフィスにたどり着けず、オフィスビルは閉ざされたままだった。マンションの一、二階の住人は浸水に戦慄き、上階の住民はベランダで洪水が早く引くことを祈るほかなかった。

海水のなかに人びとやビルが孤立したばかりではなかった。都市が孤立し、日本が孤立してしまった。

一メートルの海面急上昇とはいえ、ところによっては、一時的に、数メートルの上昇をみたところもあったのだ。

海面急上昇で港湾施設が水没してしまった。多くの船舶が転覆した。座礁したものも多かった。

日本の港湾はすべてが使用不能に陥ち入り、閉鎖された。いや、船舶は日本列島に近づくことさえできなかった。いや日本列島だけではない。近隣諸国の港湾にも近づけないのだ。世界の港湾はすべて同様だった。

日本向けの船舶は船荷をどこにも荷揚げできずに、海上を彷徨うほかな

かった。積み荷の果物や野菜、魚介類などの生鮮食料品は腐り出し、海中へ投棄された。大型のタンカーや鉱石運搬船も石油や石炭、鉄鉱石など積んだまま沖合いに待機するほかなかった。機械や自動車などを運搬中の船舶も同様だった。

27

海面上昇監視センターの警報では最高で一メートル上昇だったが、日本列島を襲った最初の一撃はそれをはるかに超えるものだった。満潮時と重なったところでは、海面が急上昇し、潮位が普段よりも数メートルも高くなった。

海岸に張り付くように建設された世界の多くの臨海都市は海面急上昇の不意打に見舞われ、多くの被災者が水のなかに取り残された。

日本列島では、幸いなことに、海面急上昇の来襲が夜間だったので、都心に通うビジネススマンたちの多くはオフィスに取り残されることなく無事帰宅することができた。だが漁港や都市港湾で被害が続出した。小型漁船は陸に打ち上げられたり、転覆するものが多く、コンテナ運搬船や大型タンカーが係留中の船舶や岸壁に衝突したり、座礁するものもあった。コンテナが崩れ落ち、原油は漏れ出した。

島国の日本は海岸線が長いだけ、さまざまな被害が発生した。被害も大かった。

沿岸の低地はすべて水没した。水没を免かれても、広範囲にわたって海水が浸入し、沿岸部の草木や農作物に塩害をもたらした。強烈の日射しが

追い討ちをかけ、多くは枯れてしまった。

一晩で、日本列島はやせ細っていった。

だがまだ序の口だった。

一時、休止していた海面急上昇がふたたびはじまると、目を追うごとに、海面が急上昇し出したのだ。そればかりではなかった。一日の天気が目まぐるしく変わり、激しさが加わった。

強烈な太陽が顔を出しているかと思えば、突然、狂風が吹き出し、大粒の雨が降りだす。晴天が突然真っ黒な雲に覆われ、突風に雷が鳴り、雹が降ることもある。気温の昇降が激しく、一日の変化が一〇度を超えるのはザラだった。

天気だけではなかった。

地底から地鳴りが響き、微かな揺れがつづいた。まるで日本列島が肩を震わせ、むせび泣くようだった。

28

「所長、海面がまた上昇したようです」

若い男がバラック建ての工事事務所に戻るなり、ヘルメットを脱ぎながら、奥の机でパソコンを覗き込んでいる中年男に向って大声で告げる。

「どのくらいだ」

所長と呼ばれた中年男は浅黒い顔を上げ、鋭い目をして近づいてきた若い男を見上げる。

「二、三〇センチですか……」

「海面上昇は一端収まったのではなかったのか」

「このまま作業をつづけるんですか」

若い男たちが工事を行なっているところは太平洋沿岸の一角に集中立地された巨大原子力発電所だった。工事事務所の所長という男は下請け会社の現場責任者で、作業全般を監督している。

巨大津波で日本列島の太平洋沿岸に立地された臨海原子力発電所が軒並み被害を受けた。原子力発電所では冷却用に大量の海水を使用するが、殆どの原子力発電所の冷却用の放水施設に津波で運ばれた大量の砂が押し寄せ、取水口や放水口が塞がれ、冷却システムが機能しなくなった。冷却水が途絶えた原子炉は過熱し、自動的に緊急停止した。タービンなどの建物も被害を受けたが、敷地内に建てられていた低レベル放射性廃棄物の一時保管用の建屋が殆ど全壊し、保管していた大量のドラム缶入りの低レベル放射性廃棄物が流された。

巨大津波後、原子炉建屋の床に高レベルの放射性物質で汚染された水（放射性汚染水）が溢れ、コンクリート壁にできたクラックからしみ出ているのが見付かった。そこで緊急対策として壁の外から応急措置を施し、万一に備えて建屋の外側にコンクリートで漏水止めをつくることになったのだ。建屋の内部は高レベルの放射能で汚染されているため、内部に入って汚染水を処理することができなかったのだ。

放射能とは放射線を出す能力またはその能力の大きさをいい、その能力をもつ物質が放射性物質である。「放射性汚染水」とか「放射能で汚染」は省略した表現で、正確には「放射性物質で汚染された水」とか「放射性物質で汚染」といふべきである。以下、差し支えないかぎり、一般に用いられることが多い「放射能」という表現を用いる。

「もちろん、作業はつづける。まだ、本社からなんともいってこない」

「本社へ報告を……」

「どういうことだ」

「海面上昇がこの調子でつづけば、この辺はすぐ水浸しになってしまうんじゃないんですか」

「そのときはそのときだ。水がくるまで作業をつづける。いいな」

中年男は椅子から立ち上がると、壁際に掛けてあるヘルメットを被り、事務所の外へ出た。

海から妙に冷たい風が吹いていた。中年男は事務所のままで立ち止まり、耳を澄ます。外へ出たとき、一瞬、海鳴りのような、だが海鳴りとはどこか違う唸るような音を聞いたような気がしたのだ。いや、音というより、空気の大きな震動のような感じだった。

いくら耳を澄まして、その音は二度と返ってこなかった。

中年男は事務所のまえの空き地に駐車している乗用車で海岸へ向う。海岸の道路で車を降りて海岸へ歩きだす。冷却用海水の取り入り口が並ぶ取水口のある岸壁へ近寄り、柵越しに海面に目を向けた。

海面は満潮時の水位を遥に超えていた。海岸に沿うように設置された取水施設の両側には、排水口から吐きだされる温排水との混合を避けるために沖合へ向って長い防波堤が設けられた。取水施設の北側の沖合へ延びている防波堤は一際長く、先端が霞んでよく見えないが、一部がすでに海中へ没しているようだった。

取水施設のクラゲなどの異物防除柵や海水導入用の防波堤にも海水が溢れるように海面が迫っている。

中年男は身体を乗りだし、岸壁間際に迫っていまにも溢れ出しそうな海



面を覗こうとするが、張り巡らされた柵が邪魔をしてよく見えない。いつもなら海水が取水口に向って流れているのに、海水は静止したままだ。

さらに水位が上昇して、海水が溢れ出すのだろうか。そう思った瞬間、海水が自分に向ってすると迫ってくるように見えた。岸壁を濡らし、海水が進んでくる。彼は恐る恐る後ずさりし、急いで踵を返した。

目の前に、発電所の巨大な建屋が聳えている。この発電所には六基の原子力発電設備が集中していた。四基が隣接して設置され、間隔を置いて二基が離れて設置されている。四基が廃炉を控えていたものの、二基増設する計画があつて、予定どおり進めばいずれ八基が連なる。だが最大需要地であつた首都圏が消えてしまい、巨大津波ですべての原子炉が運転停止に追い込まれ、日本最大の発電所も死んだように静かだった。

男は突然身体が硬直し、身の毛がよだつのを覚えた。

いつもなら、従業員や作業員などさまざまな恰好をした人びとや工事用の車が激しく往き来する海岸辺の舗装された広い道路に人影や車影は見えず、巨大な発電所建屋の周囲に張り巡らされた立ち入り禁止の黄色いテープだけがやたらに目立つ。

男は黄色いテープを目で追う。黄色いテープは延々と伸び、発電所建屋全体に張り巡らされていた。

男はふと、黄色いテープが海面上昇のレベルを示す目印のような気がした。目の前の巨大な原子力発電所は海中に取残され、二度と動き出すことがないのではないかと思つた。六基ある原子炉のうち、四基は建設されてからかなりの年月が経ち、いずれ閉鎖され、廃炉の予定だった。にもかかわらず、何度も耐用年数を伸ばして運転をつづけていた。男は今回の閉鎖の噂も噂だけで、閉鎖予定は撤回されることになるだろうと踏んでいた。

それで危険は承知で、あえて高レベルの放射能洩れの危険な補修を引き受けたのだった。

男は不意に、自分だけがひとり取残されてしまったように感じた。黄色いテープのなかは高レベルの放射能が支配する死の世界なのだ。従業員や関係者はすでに避難し、男は後始末を請け負わされたということなのだ。

男は急いで乗ってきた車で事務所に戻った。

発電所内部になにが起きているのか、詳しいことは男には知らされていなかった。原子力発電所での仕事を長年手掛けており、経験が買われて仕事を請け負うことになったと思つてた。今回の仕事はほんの小さな額のものだが、この工事のあとにいずれ大きな工事を受注できるという思惑があつた。今回は一部の漏水止めの応急工事だが、いずれ漏水止めを発電所建屋周囲に建設するという話が流れていたのだ。

だがそれも発電所が稼働しておればのことだ。海面上昇でふたたび発電所建屋が水に浸かるようなことになれば、漏水洩れ防止どころではない。男は自分の独りよがりやを笑ひたかつた。

「おい、ほかの連中はどうした。ここに戻ってこないのか」

中年男は事務所に入るなり、クーラーを効かせ、ソファに延びているさつき若い男に向って言う。

「車のなかで休んでいるんじゃないですか」

「レベルはどうなんだ」

「いまは放射線は殆ど感知されていません。汚染された土砂類は取り除いてしまいましたので……」

応急措置が効いて、漏水は止まったというのか。

男の頭を不安がかすめた。男は若い男の目をじっと見た。

「どの計器で計ったんだ」

「テープを巻いたいつものカウンタースですよ」

「他の連中を呼んでこい。作業は終わりだ。今夜にも海水が岸壁を超えるだろう。工事をつづけるわけにいかない。やってもムダだ」

男は執務機の椅子に腰を下ろすと、手を伸ばして受話器を取った。呼び出し音が鳴っているが、相手は出ない。男は受話器を片手に、事務所を出ていく若い男の背に向って「今日はもう帰っていいぞ」と怒鳴った。

しばらく受話器を耳に押し付けたままでいたが、相手は出ない。男は椅子からやおら立ち上がると、工事事務所を出て、車で工事現場へ向った。

建屋のコンクリート壁に漏水洩れの補修跡があつて、その周辺に地面を掘削した跡があつた。今回は漏水箇所を中心に建屋に沿って数メートルにわたりコンクリートの漏水止めをつくることになっていた。

男は車から専用のガイガーカウンタースを持ちだし、漏水箇所近づいていく。

カウンタースが激しく鳴りだした。

男は後ずさり、急いで離れた。

応急措置程度ではもたないのか。それとも工事に手抜きがあつたのか。それにしても建屋内部はかなり高レベルの放射能で汚染されているということか。

男は何度も建屋を振り返りながら、車に戻ると、海岸辺の道路を回り、工事事務所に戻った。海岸辺の道路にはすでに海水が溢れていた。

事務所は発電所建屋から離れた空き地にあつた。発電所建設時の残土置場だつたところで、プレハブの事務所の敷地は土盛りしてある高台のように見える。

男は事務所のまえに立ち、海を見た。海水はスルスルと触手を伸ばすように広がっていく。

やがて漏水止め工事のたために掘った窪みにも海水が流れ込み、放射能汚染を撒き散らすことになるのか。

男の脳裏に三歳になったばかりの息子の顔が浮かんだ。男は車に乗り込むと、力一杯アクセルを踏んだ。

29

「佐藤さん、浅間が……」

童顔の園部だ。突然の電話だつた。

「浅間がどうしたのですか」

佐藤は受話器を強く耳に押し当てる。

「もうすぐ噴火します。かなり大きいようです」

「……………」

彼は園部がなぜ突然電話してきたのか分からず、つぎの言葉を待った。

だが園部はなかなか口を開こうとしない。

「実は……。断言できませんが、これも海面急上昇と関連するのではないかと思うのです。今回の海面急上昇がすでに地殻へなんらかの影響をおよぼしはじめているのではないのでしょうか……」

園部はその兆候があるという。

このところ、オホーツク海プレートと接している太平洋プレートやフィリピン海プレート付近で微震動がつついている。海面急上昇を受けて、日

本列島の下に潜り込んでいるプレートの隙間に大量の水が浸透し易くなって接触面が滑りやすくなってきているのではないか。それで押し込まれて圧縮されている岩盤が押し返そうともがきはじめてにちがいない。

「そんなことがどうして……」

「メカニズムはよく分からないが……」

園部はこんなことを言う。

グリーンランドから大量の水がなくなつて、北極圏が軽くなつたが、その分が海洋全体に広がり、地球上の海面が一〇メートル超急上昇した。これで海底地殻に新たな重さが加算されたことになるし、また、これによって地球の自転軸や自転速度にも影響がおよんでいるのではないか。

「すると……」

「世界中で地殻変動が活発化することでしょう。日本列島にも火山噴火や地震の活動期が近づいてきているといえるかもしれません」

「その前触れが浅間大噴火ということ……」

「富士山の噴火もあるかもしれませんが」

「火山噴火が地震の前触れだというのですか」

「いいえ、そうとはかぎりません。これまでは地震につづいて噴火がおこるケースが多いようです。このたびの海面急上昇のもとで、地殻にどのような影響が生じるかいまのところ不明ですので確実なことは言えませんが、ほぼ同時に生起することもありうるような気がします」

園部は慎重な言い回しだが、噴火と地震の同時発生を指摘する。なにしろ、今回のような短期間に起こった急激な海面急上昇は、これまで経験したことのない誰にとつてもはじめてのケースだった。

「同時的ね。それでいつごろ……」

彼は紅潮している童顔を思い浮かべながら、探りを入れる。

「近いと思います」

「浅間が噴いて、富士山が噴くのですか……」

「多分、三陸沖から宮城県沖、茨城県沖、そして東海地震などのプレート型巨大地震や内陸部での断層型地震が続発することになるかもしれません」

「日本列島全体が……」

「ええ」

「一度に起きるということですか」

「その可能性があります。あつ、いま揺れたようです。では電話を切ります。では」

園部は電話を一方的に切った。

30

佐藤は会議室へ走った。

会議室の大型スクリーンには日本上空の監視衛星からの日本列島の画像が写し出され、大勢の人びとが集まっていた。

日本列島の海岸線をなぞり、北から南へ大写しされていく。

海水は田畑や野原、道路や空き地に入り込み、障害物を避け、音もなくするすると進む。海が陸地に食い込み、海岸が後退し、海が広がる。日本列島はそのたびに痩せ細っていった。

高層ビル群が見えた。かつては海岸辺の埋立地にあつた超高層マンションも、いまは海中のなかだ。

日本列島の海岸を埋め立てて造成した埋立地は、日本が二〇世紀後半から営々と積み重ねてきた経済活動のツメ跡でもあった。

経済成長の掛け声のもとに、海を征服するかのよう大量の土石を投げ込み、海を埋め立て、土地を造成し、ビル街や工場地帯を作り上げてきた。手っ取り早い領土拡張策だったが、こうして手に入れた新領土もすべて海中に消えてしまった。

水中から高層ビルや石油タンク、発電所や剥き出しのパイプを縦横に張り巡らした化学プラント、火を噴いていた製油所のファイアスタックが頭を出しており、僅かにかつての埋立地の名残をとどめている。

沿岸に広がる大都市圏が写し込まれた。突然の海面急上昇に襲われた大都市は、押し寄せた海水に身ぐるみ略奪されてしまったかのようだった。

沿岸の大都市の多くは都心まで海水が押し寄せ、一面水浸しになった。人びとや車で溢れていた幹線道路には海水が溢れ、大河と化した。時折、ゴムボートが行き交うはか、全く人影はなかった。

ボートが大写しになった。人影があった。

オフィスビルやマンションにまだひとが居座っているのだろうか。それともどこかに助けを求めているひとがいるというのだろうか。

「浅間は噴いていませんか。内陸部を写して見て下さい……」

延々とつづく沿岸部の映像に堪りかね、佐藤が声を掛ける。彼は人を掻き分け、前へ出た。

「……実は、海面急上昇で噴火や地震が多発するらしいのです。浅間が噴火しそうだと言ったもので……」

画面が内陸部へと移動していく。

内陸部の平野部に広がる街の周囲や田畑のなかに走る高速自動車道や幹

線道路には車が数珠繋ぎになっている。だが一歩山間部に入れば、平常と変わりなく、何事もなかったようにのどかな風景が連なっていた。

山のなかに一際高い山の頂上付近から煙を吐いている山があった。ズームアップしていく。

「浅間だ……」

突然、むくむくと灰色の煙が高く立ち上った。

「噴火だ、大噴火だ……」

前列の一人が叫んだ。

「ほかにないか探すんだ。富士山はどうか」

富士はまだ噴いていない。

「大地震が来るかも……」

彼はそう言い残すと、部屋に戻った。机の椅子に腰を下ろしたとき、微かな横揺れを感じた。

31

「やあ、佐藤くん……」

九鬼だ。受話器の奥から響く声はいつもと違ってどころなしな弱々しい。

「一寸まえ、浅間が噴いて、いま、地面が揺れています」

「これから、当分の間、環太平洋地震帯で大地震や噴火が続発することになるかもしれません」

「そうですか。ところで、グリーンランドの水床大崩落は収まったのですかね。かなり海面が上昇しているようですが……」

「一段落したとっていいようです。滑落しそうな氷床は殆ど滑落したようですからね。ただ問題は……」

「まだ問題があるんですか」

「氷床の融解水が海洋に流れ出てから平準化するまでにかかる時間がかかるともならない」

「平準化……」

「海面レベルの平準化ですよ。平均一〇メートル上昇といっても、世界の海面が軒並み一〇メートル上昇するのはかなり先です。もしかしたら、いつまで経っても海面が平準化せずに、高いところや低いところが残るかもしれない。海水中でも水温や塩分濃度の違う水塊はなかなか混じりにくいのですよ」

「それが問題なのですか……」

「多分、グリーンランド氷床の大滑落によって生じた氷床融解水が巨大な冷水塊を形成して気候異変をもたらすことになるでしょう。巨大冷水塊はすでに大西洋や太平洋に流れ出ると考えられる。いや、すでに漂流しているでしょう。これらが大陸沿岸や日本列島沿岸に近づき、そこに停滞するようになれば、大潮や副振動のときのように海面をさらに盛り上げたり、気温を下げたりすることになる」

大潮は月、太陽、地球が一直線に並んだときに生じる高低差のある潮汐で、満潮時に潮位が普段より大きくなる。副振動は主振動である潮汐とは別の原因がわからない異常潮現象で、湾や海峡などで数日にわたり異常に高い潮位を示すことがある。

「温暖化なのに、冷害ですか。酷いものですか」

「いま、巨大冷水塊を探して、データを集めているところだが、そのうち

詳しいことが分かるでしょう。日本列島沿岸には冷水域が形成されやすいので心配なんですよ」

日本列島では冷水塊が襲うことが多い北日本全域で冷害や長雨、一方西日本では酷暑や日照りつづきといった異変に見舞われることになるという。もちろん、冷水塊が南下して、東日本全体を冷害が襲うこともあるのだ。

「海面上昇は海面が上昇するだけかと思っただけだなあ」

佐藤は大きな溜息をつく。

「地球上の出来事は地球全体と緊密に結び付いているからね」

九鬼はつづけて、地球だけではない。太陽系、さらに、宇宙全体と関係していると考えるべきだが、そこまではまだ手を伸ばせずにいるという。

「今回の海面上昇は一応、巨大冷水塊まで考えればいいんですよ」

彼は念を押す。だが彼にはまだ九鬼がなにかを隠しているような気がしてならなかった。とにかく、地球システムが攪乱し出している以上なが起きてても不思議ではないのかもしれない。彼は耳をそばたて、受話器の奥から漏れてくる九鬼の息遣いをじつと聞いていた。

しばらくして、九鬼の息遣いが途切れた。彼は九鬼を呼んだが、返事がなかった。電話はいつの間にか切れていた。

32

海面上昇は一段落を迎えたのか、海は何事もなかったかのように、静かに波打ち、新しい波打ち際で砕け白い泡となる。

だが海面上昇が終わったわけではなかった。地球温暖化が解消しないか

ぎり、第二期、第三期の海面急上昇が襲うだろう。

今回世界を襲った海面急上昇（第一期）では海がするすると陸地に広がり、世界中の陸地を侵食し、臨海の大都市や大リゾート施設を呑み込んでいった。臨海に連なる工場群や火力・原子力発電所、海のなかの埋立地や空港、海岸を走る道路や鉄道、大小の港湾施設など、臨海部の諸施設がすべて海の餌食となってしまった。

日本列島を襲った海は音もなく近寄り、陸に上り、長い時間をかけて営々と築き上げてきたものを有無を言わず奪い取っていった。日本列島は首都圏の沈没につづき、大阪、名古屋などの沿岸大都市が水浸しとなり、高層ビル群が海中に取残されていた。突然、海中部市が出現したような風景だった。

日本列島の沿岸部に連なる火力発電所や原子力発電所は軒並み水浸しとなり、発電をストップしてしまった。太平洋ベルト地帯など、日本列島沿岸の工場群も海水に襲われ、操業停止に追い込まれた。

海に住まいを奪われた被災民は打ち寄せる海水に後ずさりするほかなかつた。いくら後ずさりを繰り返しても、海水は詰め寄ってきた。

被災者が後ずさりに疲れ果てたころ、海は住宅やマンションを呑み込み、工場プラントや発電所の配管や建屋、石油タンクなどさまざまな夾雑物を呑み込んで満腹になったのか、ようやく前進を止めた。

## 第四章

33

「どうやら、海面急上昇は一段落したようだが、海面上昇対策本部の結論はどうなったんだ」

佐藤は両袖の課長用執務机のまえに置かれている椅子に座り込みながら、斉木の目をじつと覗く。斉木が対策本部に参加していたと聞いて、取材に訪れたのだった。

海面上昇対策本部は海面急上昇がはじまってからしばらくして漸く設けられた。保守党政権のもとで、政府はこと地球温暖化対策に関していつも及び腰で後ろ向きだった。政権交代で一時地球温暖化対策が脚光を浴びることがあっても、反対勢力の巻き返しもあつて重工業中心の経済成長路線を変えることができず、なかなか前へ進まなかった。

地球温暖化対策軽視の傾向は被害が現実になってからもつづいた。政府も議会も首都圏島沈没が地球温暖化の果てに生じた現象だとは決して認めようとしなかった。

もしこれが地球温暖化のせいだとすれば、政府としては地球温暖化を招く二酸化炭素排出量の削減策を極力押し進めなければならず、そのようなことになれば、日本財界の二大勢力であり、二酸化炭素の大量排出産業である鉄鋼業界と電力業界が黙ってはず、正面衝突が避けられない。地球環境の将来を憂える官僚たちが地球温暖化対策を提言し行動を起こしても、いつのまにか財界の二大勢力やそれを後押しする政治の壁に阻まれ、押し

返されていた。斉木も何度も挫折を繰り返していたのだ。どんな風の吹き回しなのか、そんな彼に対策本部から突然お呼びがかかったのだった。

「ああ……」

斉木は俯いたまま、気のない返事をした。

今回の海面急上昇は夏の終りの一か月間つづいた。上昇速度はところによつてさまざまだった。日にほぼ二〇センチから三〇センチのペースで上昇した。ところによつては急激に進み、短期間に一〇メートルを超えたが、日本列島周辺では五メートルから一〇メートルほど上昇して一段落したのだった。なぜか北日本や東日本の太平洋岸で高かった。

斉木は生気のない顔を上げ、耀きを失い、死んだ魚のような目で、彼を上げしげと見るが、口を開こうとしない。

突然海面急上昇に襲われた沿岸の市町村から関係各省に相次ぎ被害情報が寄せられ、政府が漸く重い腰を上げたという。対策本部が立上げられ、関係各省の連絡会や合同検討会が設けられ、連日会議が開かれた。会議がはじまると、以前は一切耳を貸さなかつた連中が海面急上昇対策を唱えていた斉木を引つ張り出し、幹事役に担ぎ上げたのだった。

「政府の対応は決まったのだろう。どうするのだ。お前の考えが通りそうか……」

彼はもう一度返事を促す。

「温暖化した地球のなかで、この国の将来を見据えた打つ手が見付からない。首都圏島沈没のショックの後遺症か、ならん新しい考えが思いつかないらしく、同じことを繰り返そうとするだけだ」

斉木は宙を見たまま、ぽつんと言う。

「なんだと……」

「状況認識が甘く、この国を変えるような新しいことはないのだ。いくらムダだと言っても、いまから防潮堤を張り巡らそうというのだ……」

齊木の目が光り出した。

「……………」

彼は齊木の目を見て、黙って話しだすのを待つ。

「国会議員の先生方は選挙区の方だけを向いて、早く港湾を整備しろとか、都市の回りに防潮堤を築けとか、緊急に食糧を輸入しろとか、はたまた埋め立てをはじめようなどと無謀なことばかり言っている。だがいまの日本にそんな金はない。たとえ、金があったとしても、海面急上昇に襲われた世界の状況を見れば、どこからどうやって建設用の資材や食糧を輸入することができるといえるのか。日本は海面急上昇で資産の大半を失ってしまっただ。国に残っているのは一〇〇兆円にもよる借金（国債）だけだ……」

やせ細った日本列島の姿は永年の政治の貧困を具現したものにほかならなかった。官僚や政治家は、国や国民のことを考えるまゝに自分のことを考えてきた。まして地球温暖化などの地球環境問題の意味を考えることもなく、官僚は利権を漁り、政治は無策の策に徹し、経済政策はバカの一つ覚えで成長経済一点張り、それも大企業中心だった。そのうえ、格差が生じようが雇用が減退しようがお構いなしと来た。とにかく、世界の中で、日本をどの方向へ導くのかといった未来のビジョンがなく、結果として、この一〇〇年、日本はジリ貧の道を進んできた。

それにもかかわらず、毎年のように、景気対策だと称して赤字国債を発行して財政出動を行い、経済成長を追い求め、今では発行債券残高が一〇〇兆円を超えてしまった。それに、今回の海面急上昇で日本列島は四国分ほどの領土を喪失し、首都圏島沈没後日本列島に残っていた資本集積地

域があらかた海中へ没してしまったのだ。

北海道では石狩勇払低地、十勝平野、根室低地など、東北地方では下北半島、北上阿武隈低地帯、日本海沿岸低地などだ。関東平野はすでになく、中部地方では東海沿岸低地、北陸沿岸低地、大阪列縦断低地帯など、このほか、太平洋や日本海の沿岸、瀬戸内海沿岸など日本列島沿岸に散在する低地帯が軒並み海水を被って、海中へ没していったのだ。もちろん、海岸に造成された埋立地や建設された海上施設はいずれまでもない。

日本列島の約七〇パーセントは山地だ。農漁業や工業などの産業活動の拠点や都市は残りの三〇パーセントの低地に集中する。今回の海面急上昇で、首都圏島沈没につづく、日本列島の低地の大半が水浸しになり、海中へ没してしまったのだ。

「……………」

彼は「だからどうした」と言いたかったが、口を閉ざしたまま齊木を見ていた。

「巨大津波の復旧工事がようやく軌道に乗りかけたところだったのに、今回の海面急上昇だ……」

齊木は一瞬言淀む。

首都圏島沈没と太平洋沿岸への巨大津波で日本経済が大打撃を受けたばかりだったところに、一〇メートルもの海面急上昇が襲ったのだ。これで沿岸大都市は壊滅的被害を受け、沿岸低地や埋立地の工場地帯やエネルギー基地は徹底的に痛めつけられ、完全に操業不能に陥ってしまった。

「それでなんだ。なにがあるんだ」

彼は言淀んだ齊木を追及する。

「実は、海中に取残された工場プラントや発電所、それにタンクから石油



や原料などのほかに、有毒な化学物質や放射性物質が流れ出はじめているのだ。問題は、これらの物質が沖へ流れず、岸に打ち寄せていることだ。

まるで日本列島が毒液に浸かっているような状態なのだ。それなのに……」

グリーンランド氷床の滑落現象は一段落したものの、海面の上昇はまだつづいていたのだ。陸地への海進とともに、これらの有害物質も海水とともに陸地に広がっているらしい。ことに、水浸しになって海中に取残されている状態の原子力発電所や放射性廃棄物処理施設などから放射性物質が漏れ出し、危険視されているのだ。このため、その付近ではかなりの範囲が立入り禁止となっているという。

「それなのになんだ。まさか……」

「住民や漁民のなかには立入り禁止を無視して海に入るものがおり、素手で貝や海藻を採取し、獲った魚介類を販売するものもいるらしい」

「取り締まらないのか。市町村は何しているんだ」

「黙認どころか、むしろ、後押ししている感じだな。国は何もしてくれないし、被災者は腹を空かしている。未曾有の大量被災者を抱えた被災市町村にはこうするほかないのだろう。なにしろ、日本国中いたるところに飢えた大量の環境難民がうごめいている有様だからな」

海面急上昇では、太平洋沿岸だけだった巨大津波とは違って、日本列島の海岸線すべてが被災地となり、沿岸低地に広がる農耕地が水没してしまった。漁港も壊滅的被害を被った。また、沿岸都市も海水に襲われ、被災者も倍増した。ことに、太平洋沿岸部の住民は巨大津波につづいて海面急上昇に襲われ、相次ぐ二度の災害の被災者となったのだ。津波と違い、海面急上昇では海水がじわじわと押し寄せるものの、被害者の多くは財産を持ち出すひまもなく、すべてを失い、着の身着のままだった。

「被災者は五〇〇〇万人を下るまい。国はただ手を拱ねているだけか……」

「そんなことはない。この大量の被災者対策をどうするか、いま一生懸命考えているところだ。国はなんとしてでも彼らを救済しなければならない。さし当たり、五〇〇〇万人の食料だ。それに住まいはどうするか。とにかく、国としてはなんとしても、この五〇〇〇〇万の被災者を食わせ、寝る場所を確保してやらなければならないのだ」

「どう救うのだ。国は資産の大半を失い、借金しかないのにどうしようというのだ。いまのこの国にはそんな力があるのか」

彼は斉木を睨み、思わず、詰問調になる。官僚斉木の言い分はわかるが、彼には空々しく聞こえる。

「世界銀行などの国際金融機関や外国から金を借りて、なんとか日本経済を再建することだ。五〇〇〇万の被災者だけの問題ではない。これは一億の日本国民全体のためにもやらなければならないのだ。いま日本はどんな状態にあるのか、誰も現実を見ようとしない」

斉木は顔を紅潮させ、気色ばむ。だが空回り気味だった。

「海面急上昇は世界全体を襲った。救済や資金が欲しいのは日本だけではない。世界中が助けを待っているのだ。それに日本経済を再建するといっても、どう再建するつもりなんだ。世界第二位だった外需本位のかつての産業構造の経済運営はもはやムリだ。今後は重工業や化学工業、自動車産業などのエネルギー多消費資源多消費型産業はもはや成り立たない。大量生産大量消費大量廃棄システムそのものが徹底的に見直さなければならないんだ」

「……………」

齊木は口をきつく閉じ、怒った目でじつと佐藤の顔を見ている。

「海面急上昇で沿岸低地をすべて喪失してしまい、山地だけになった日本列島では、かつての太平洋ベルト地帯のような臨海工場地帯をふたたび建設することはできない。また水に浸かった都心を放置したまま、都市を再開発することも難しいだろう」

「……………」

「まさか、また、埋立地をつくり、太平洋ベルト地帯をつくろうとしているのではあるまいな。それとも海中の高層ビルの上に橋を渡して水浸しの都市を海上都市として蘇らそうというのではあるまいな」

「海上都市か、それはいいアイデアだ。そういう手もあるな」

「バカ言え。これからどんなことが起こると思ってるんだ。海面急上昇は一段落したといっても、それはグリーンランド氷床の滑落が一段落しただけで、海面上昇が終りになったのではない。南極大陸にはグリーンランド氷床の一〇倍もの氷床が残っているのだ。そのなかで西南極大陸の氷床はまもなく大滑落を起すかもしれない不安定な状態にある。南極大陸の氷床は別として、グリーンランドから滑落した氷床で生じた今回の海面急上昇はいまだに平準化の過程にあつて、日本列島沿岸海面は今後さらに上昇することもありうるのだ。そのうえ……………」

彼は口を休め、齊木を見た。顔が幾分青ざめて見える。彼は九鬼が指摘していた今後日本列島を襲うであろうさまざまな異変を思い浮かべる。

「……………」

齊木が口を開きかけたが、声は低く聞き取れない。その声も途中で途絶え、つづかなかつた。

「とにかく、今回の海面急上昇は第一期の海面上昇にすぎないのだ。第二

期、第三期とつづく。それに海面上昇に派生してさまざまな異変が明日にも日本列島を襲うことになる。これらのことを考慮せずに、闇雲に日本経済を再建しようとしても、巨大津波被害の復旧対策の二の舞いになり、さらなる海面急上昇ですべてがムダになる。このままでは、必ず同じ過ちを繰り返すことになりかねない」

彼には気候変動にはじまった地球システムの攪乱が大気大循環を変え、海洋大循環から地殻変動をも惹起するという九鬼の予測が本当に現実となるのか分からなかつた。できたら九鬼の予測が外れて欲しかつた。日本列島はすでに十分すぎるほどの災害に見舞われてしまっているではないか。

だが将来の見通しのないまま、以前の日本経済の再建に走り出そうとする動きをまえにして、彼は今後日本列島を襲うであろう大異変や大災害についてどうしても一言言っておきたかつたのだ。

「かといつて、山間部で農園をといてわけにも……………」

彼は俯き加減になつて執務机に目を落として呟く齊木をしばらく眺めていた。

口が重く、返事する気もしない。やがて、彼はやおら椅子から立ち上がると踵を返し、ドアに向つた。

彼の小柄な身体がドアに近づいたとき、間延びした横揺れを感じた。後ろを振り向くと、机のまえに立ち上がった齊木の身体が揺れていた。

3 4

「地震か。どこだ……………」

佐藤は声を上げ、斉木の机のまえへ戻ろうと身体を回す。応接セットが床のうえを滑って踊っている。まえへ進もうと足を出す、身体が動かない。彼は床に跪き、揺れが収まるのを待った。

何秒か、それとも何分か、彼はかなり長い間床に跪いていた。

いよいよ地殻変動がはじまったのか。海面急上昇で重しを増した海水の水圧に太平洋プレートが反応したのだろうか。太平洋プレートではなくて、フィリピン海プレートのほうだろうか。震源は東南海トラフか、西南海トラフか、それとも双方か。

「大丈夫か……」

斉木の顔が覗いている。

すでに揺れは収まっていた。彼はゆっくり立ち上がる。

「モニターが蠢動し出し、マグマが噴きだす……」

彼の口から思わぬことが飛びだした。

「……………」

斉木は呆然として立ちすくみ、彼の顔を見ている。

「おい、斉木、どうした。地震はどこだ」

「うん、お前、大丈夫か」

「大丈夫だ……」

彼が斉木の方に顔を向けたとき、白いワイシャツ姿の一人の男が入ってきた。乱雑に動いた応接セットの椅子やテーブルを見て、驚きの声を上げる。

「課長……」

課長補佐の白川だった。

「あ、揃ったか」

斉木は白川に伝えると、彼に「これから会議なんだ」と言い、ドアへ向かう。そのとき、ふたたび揺れた。上下に小刻みに揺れる。

「震源はどこだ。まえのと違うな」

「課長、前の震源は東海沖だったようです。今度は……」

白川は机のモニターに走り寄る。

「富士山が噴くかもしれないぞ」

彼が呟く。

「なんだと……」

斉木は彼の顔をじつと見る。

「今の地震の震源は茨城沖かな。小田原付近にも震源が……」

白川はモニターに目を据えたまま、つぶやく。

「なに……」

斉木が白川が覗いているモニターに近寄る。彼も後ろから液晶画面を覗く。

モニターに日本列島が写しだされ、震源箇所がポイントアップされている。

「おい、これはどういうことだ……」

日本列島の太平洋沿岸に、茨城沖と小田原付近の大きな震源印の混じって無数の小さな震源が写しだされていた。

「微小地震ですか……」

「日本列島全体が揺れだしているということか」

「海面急上昇の影響ですか」

「海面が上昇すると地震が起きるのか」

「そうらしいです……」

「そんなことは誰も指摘していないんじゃないか……」

「あの先生以外は……」

「白川くん、誰かね、その……」

「佐藤さんのお友達の……」

「九鬼教授のことか」

「もうひとりいました。園部とかいう研究者もそんなことを言っているとか、このまえ聞きましたか……」

「そのべ？」

「独立行政法人K研究所の研究者だ、若いが頭の切れるやつだ」

彼は童顔の若い研究員を思い浮かべ、口を挟む。

「どんなことを言っているんだ。一度呼んでみるか」

白川は早速受話器を取る。

「課長、掴まえました。どうしますか。すぐ来てもらいますか」

「オレが出る」

彼は白川から受話器を奪った。

「M新聞の佐藤だ。地震が続いて起きているが、海面急上昇と関係があると思いますか。いまの日本列島の地殻の状態をどう見ていますか。とくに、変わったことはありませんか……」

彼は紅潮した童顔を思い浮かべ、矢継ぎ早に問う。

「このまえ、九鬼先生にお会いしました。そのとき、先生は富士山の噴火を心配なさっております……」

突然、園部の声が途切れた。

「で……」

「もうじき、富士山が噴火をはじめそうです……」

「え？ 富士山が……」

「九鬼先生が富士山の噴火が日本列島における大地殻変動の前兆現象となるかもしれないと指摘なさっておりますので、観測をつづけているのです。火山性地震がつづき、マグマがかなり上昇してきています」

「すると……」

「そうです。いま、起きている地震もその前兆と見るべきだと思います。やはり、今回の海面急上昇がひとつの要因となっていると思います。あ、大きな地震が起きました。五秒以内に大きな震動がやてきます……」

電話が切れた。

「大地震が来るぞ」

彼の叫び声が終わらないうちに、ビルがゆっくり揺れ出した。次第に揺れが大きくなった。突然揺れが大きくなって、窓ガラスが鳴り、ヒビが走る。窓枠が外れて床に落ちた。壁にもヒビが走り、天井は破れ、照明器具やボード片が落ちた。応接セットは踊りだし、スチールロッカーは扉を開けて倒れた。応接セットや倒れたロッカーが床を滑り、壁に激しく衝突する。

彼は両手で机にしがみついたが、激しい揺れにむなしく手が払われ、床に叩き付けられた。机は滑り出し、上のものは宙に浮き、床に落ちて一面に散らかった。彼の身体の上にもパソコンや書類が降りかかった。彼は身を起こし、壁際へ身体を寄せ、怪我がしたところがないか調べる。右足の膝が痛かった。まだ揺れているような気がしたが、おそるおそる足を曲げる。揺れが収まるのを待って立ち上がる。関節に傷みがなかった。骨折していないらしい。

揺れが収まると、斉木と白川が部屋の片隅に寄せられた机の下から這い

出した。二人は彼の声にすばやく机の下に潜り込んだものの、机が滑り出し、壁際へ寄せられてしまったらしい。

「大丈夫か……」

斉木が声を掛ける。彼が床に叩き付けられたのを見ていたのか。

「うん、どうやら打撲傷で済んだらしい……」

「お前は不死身だからな」

「お互いな……」

彼の脳裏に首都圏島とともに海中へ投げ出されたときのことが浮かんだ。

あのとくに比べれば、まだまだ。

彼は斉木を見て、笑顔をつくる。だが身体が震え、顔は強ばっただけだった。

「……とここで、震源はどこだ……」

彼は強ばった顔を解きほごそうとするが、震えが止まらない。

「余震があるかもしれない。外へ出ないほうがいいだろうな。しばらくここで待ってみるか」

斉木が窓へ近寄る。窓ガラスには細かくヒビが走り、いまにも落ちそうになっているが、落下防止のフィルムでかろうじて落下を免れている。だが一部の窓枠が壁から外れて床に落ちたものもあつた。壁から外れなかった窓枠も落ちそうになっている。

「課長、あまり側によると、危ないですよ。余震で落ちるかも……」

「これは酷い。このビルが免震構造じゃなかったのか」

「共振したのかもしれませんが」

「この地盤は固くないのか。これまでこの辺の超高層ビルで長周期地震動で共振現象が起きたことがあるのかね」

超高層ビルでは周期が二秒から五、六秒の長周期地震動に襲われると、

ビル固有の振動と共振し、震動が増幅されて揺れが大きくなりやすいのだ。揺れは長くつづく。ビルの高さや構造と地震動の周期によるが、大きな揺

れが数分もつづくことがある。長期震動は地表面から地下深部の岩盤までの距離が大きいところで、たとえば大河川の流域のデルタ地帯や火山灰が降り積もつてできた厚い地層や地形で起きやすいという。

「課長、いまの地震の震源地は宮城県沖らしいです」

携帯電話を耳に当てたまま、白川が叫ぶ。

「なんだと……」

震源地が宮城県沖と聞いた途端、彼は反射的に床から身を起こし、急いで立ち上がると、憑かれるような足取りで一直線にドアへ向う。

35

「佐藤さん、宮城県沖で大地震が発生したようですが、どんな具合ですか……」

本社に戻ると、彼を待っていたように机の電話が鳴った。九鬼だった。実家に何度も電話しているが繋がらないという。

九鬼の実家は宮城県北部に広がる大崎平野の中核都市で代々医院を開業してきた。弟信二郎が家を継いでいるが、夫婦には子がなかった。夫婦は九鬼の一人息子アキラを預かり、わが子のように可愛がっていた。

「アキラちゃんのことですね。まだ、詳しい情報が入ってない。これから取材ヘリに潜り込もうとおもっている。新首都エリアの地盤が意外に柔ら

かいらしく、こつちでも高層ビルに被害が出ている。いま、合同庁舎ビルから戻ったところですが、横揺れが酷かった。多分、長周期地震動によるのか……」

彼は宮城県沖が震源だと耳にして斉木の部屋を出ると、エレベーターを探したが、動いていなかった。漸く探し当てた非常用階段は避難する人びとで混雑していた。人込みのなかに潜り込む。一刻も早く本社に戻りたかった。九鬼から電話があることは分かっていた。それよりも地震被害取材のヘリコプターに潜り込みたかった。

早く戻らなければ間に合わない。彼はいらいらしながら、まえのひとの肩に手をかけ足を踏まないように気をつけ、階段を下りていく。

エントランスは外へ出るべきか迷っている人びとで溢れていた。彼は隙間を縫って外へ出る。ビルの外には割れたタイルやガラス片など散乱していた。彼は小走りでビルから離れ、振り返る。

ビルの外壁が大きく剥がれ、宙にぶら下がっている。外壁が完全に剥がれ落ちたところから鉄骨が剥き出しにのぞいていてではないか。

彼は走りだす。

道路のアスファルトに小さな亀裂が走っているが、殆ど目立たない。低層のビルには被害らしい被害はなかった。一〇階建ての本社ビルにも外壁が剥がれるような被害は見当たらない。

「大津波か……」

受話器の奥から、九鬼の押し殺した声が漏れた。

「おおつなみ？ 津波がどうした……」

「海水が……、モニターに……」

「分かった。ヘリがでるらしい。戻ったら、連絡するから……」

彼は受話器を戻し、走り出す。

37

一斉に潮が引いた。海面急上昇によって海中に没していた岸壁や防波堤など顔を出した。以前の港湾施設が姿を現わした。

前の海に戻った。と思つたつぎの瞬間、轟音とともに、巨大な波が白い波頭の鎌首を立てて押し寄せてきた。顔を出していた以前の岸壁が一瞬のうちに水中に姿を消していった。

鎌首を立て、背を逆立てて突き進む大波は湾内に入り、波高を急速に高める。一〇数メートルを超える高波となって陸をめざす。

湾奥でさらに波高を高めた。陸にのぼり、超スピードで駆け抜ける。

地震で外壁や瓦が落ちた建物や地盤が揺らぎ基礎が緩んだ建造物が勢く押し寄せる大水塊になぎ倒されていった。壊れて流された家屋の柱や丸太が回転しながら路上の自動車やショーウィンドーの分厚いガラスを打ち壊す。

湾奥には国内有数の漁港があり、常時多くの大型漁船が往き来していたが、今回の海面急上昇で漁船は待避を余儀なくされていたものの、湾内に残っていた船舶もあった。これらの船舶の殆どが津波の第一波で陸に打ち上げられ、転覆した。転覆した船舶が流され、建造物に激しくぶつかる。なかには湾に注いでいる河川を遡上する津波に流され、橋梁や鉄橋に激突した。これらを損傷し、船も木端微塵となった。

大崎平野には数多くの河川が流れ、農作物に欠かせない水の供給源となつ

ていた。これらの河川は農業用水を供給しながら平野を貫流し、大河となつて湾奥に注ぐ。この何本もの河川や運河が津波の高速道路となった。河川を一気に上った津波は平野の奥の奥まで押し寄せていった。いたるところで堤防から溢れ、津波は一帯を水浸しにし、一面洪水となった。何度も繰り返す津波に堤防から水が溢れ、洪水が広がっていく。街や農耕地を呑み込んでいった。

道路は水没し、流されずに残った家屋が二階まで水に浸かった。塩水を被った電線はショートし、火を噴く。畑が水浸しになり、水田に塩水が流れ込んだ。

あつという間の出来事だった。

避難する余裕すらなかった。

津波は何度も襲った。そして多くのものを流し、破壊し、ひとを傷つけ、命を奪っていった。

やがて、津波は衰え、収まった。あとには海面急上昇もたらした新しい海岸が間直に迫り、陸には泥に塗れた壊れた船の残骸、押し潰された車、柱が抜け壁が落ちた家屋の残骸、冷蔵庫などさまざまな家電製品、ペットボトルや発泡スチロールの箱や蓋、ポリ袋や布きれなど雑多なゴミが散らかり、道路や樹木や農作物に船舶から流れでた黒い重油がべつたりと付着している。そのなかに遺体や助けを待っている怪我人が横たわっていた。

湾内には流された行方不明者や助けを呼ぶ被害者を探す小舟やゴムボートが往き来していた。

遠くで救急車のサイレンがした。

38

「ハロー……」

何度電話しても、留守番電話で返事がない。待っているはずの九鬼が出ないのはどうしたのか。

佐藤は苛々しながら、もう一度呼びだす。だが受話器からは留守のメッセージが流れてくるだけだった。数時間前に電話をかけたのに、どこへいつてしまったのだ。あのとき、取材から帰ったら電話すると言っていたのにと恨みがましく思ったものの、九鬼が電話口に出てきたら、なんと話していいのか分からなかった。

彼は九鬼からの電話を切つて、急いでヘリコプターに飛び乗ったが、なら情報を得ることなく戻ったのだった。

夕刊の締め切り時間が迫っていた。ヘリコプターは上空から数枚写真を撮るとすぐ引き返してしまった。その間、闇雲にビデオを回しつづけていたものの、彼には九鬼の実家がどの辺なのか見当がつかず、最後まで確認することができなかった。津波のあとの市街地には以前の面影はなく、全然見当がつかなかったのだ。

彼は取材してきた収録テープをモニターにセットし、再生した画面に目を移す。

ふと、このビデオをインターネットで九鬼宛に送ろうかと思った。これを見れば、実家の安否は一目瞭然なはずだ。

彼はモニターに目を据え、再生した画面に目を凝らす。

街の中心近くまで津波が押し寄せたらしく、なかには潰れかかった半壊状態の家屋もあったが、道路や公園には自動車や材木、雑多なゴミや板の

切れ端などの残骸が樹木や橋の欄干に纏まり付いていた。一面水に浸かったのか、いたるところに水が引いたあとが残っている。

なぜか、人影はなかった。住民たちは一人残らず、津波のまえに避難し了えたのだろうか。もしそうなら、九鬼が案じていた一人息子アキラはもろろん、家族も無事ということになるのか。

彼は大きく息を吐いた。吐いた途端に、不安が芽生えた。

逆のこともあるではないかという思いが彼を捉えた。避難する暇もなく、突然津波が住民を襲ったのかもしれない。一人残らず住民がすべて犠牲になったのかもしれない。でもそんなことはありうることだろうか。彼は急に不安に駆られた。もう一度取材にでかけたいと思った。

モニターには人影がない。人ひとりいない津波に襲われた大崎平野の画面が延々とつづいている。

ふと疑問が湧いた。首都圏島沈没の巨大津波のとき、この地点には津波が押し寄せなかったのだろうか。あのとき、九鬼はなんとも言ってこなかったし、あとでも話題にもしなかった。とすれば、九鬼の実家は巨大津波で被災することがなかったのかもしれない。

ではなぜ、今回の津波に襲われることになったのか。なぜ、平野の奥の奥まで津波が達したのか。津波の規模がまえより大きかったからか。海面急上昇によって海面が以前よりも急上昇したせいなのだろうか。

彼はなんとなく信じられなかった。割り切れない気持ちで画面を見ることなしに見ながら、頭のなかで帰途へリコプターから見た海面に無数の黒い斑点が点々と浮かぶ仙台湾の海を思い浮かべた。

やはり、もう一度確かめてみよう。巨大津波のときのデータと比較するのだ。ビデオを九鬼へ送るのはそれからにしようと、彼は思い、電話に手

をのぼした。

「もう、後片づけは済んだか……」

「なんだ、お前か……」

受話器の奥から、斉木の気のない声がした。

「宮城県沖地震の被害は思ったより酷かった。ところで、ひとつ、頼みがあるんだが……」

佐藤は今回の地震では地震の被害よりも津波の被害が大きかったことを詳しく説明した。

「なんだと、巨大津波より被害が大きいというのか……」

「どうもそうらしい……のさ」

「なぜだ。そんなことが、どうして……」

斉木は頭から信じていないらしい。

「本当に大きかったのか、現地へ行って被害の状況を調べてこようと思っている。で、巨大津波のときのデータが欲しいのだ」

「そうか。分かった。御苦労なことだ。で、いつ行くんだ」

「これからじゃ、すぐ日が暮れちゃうから、明日にしようと思っている」

「明日だな……」

斉木は一呼吸置いてから、「用意しておくから、取りに来い」というと、直ぐ電話を切ってしまった。

彼は受話器をしばらく持ったままだった。斉木に巨大津波より被害が大きいらしいと言ってしまったが、本当にそうなのか。

斉木の頭から信じようとしたくないような声を耳にして、彼もますます半信半疑になっていくのだった。

なぜ巨大津波のときより被災地が拡大したのか。この度の地震の津波が



首都圏島沈没の際の巨大津波より大きかったのだろうか。それとも急上昇した海面が津波を増幅させたのだろうか。

彼は受話器を返しながら、もう一度、ビデオを見てようと思った。

39

「いいとこにきた……」

ドアから顔を出した佐藤を見ると、めずらしく斉木が机がら立ち上がり、応接セットに移る。

「大分、片付いたようだが……」

彼は窓に目を向けた。室内はすっかり片付いていたが、ヒビの入った窓ガラスはそのままだ。

「あれは大丈夫だ。落下防止のフィルムが張つてある。ところで、実は海面急上昇と地震の関係だが……」

斉木は彼が椅子に腰を下ろすのを待ちきれないように、口を開く。

「……やはり、海面上昇で地震が頻発するようになるというのは本当なのか。宮城県沖地震は今回の海面急上昇と関係すると見ていいのか。これからも度々地震が起こることになるのか……」

「なんだ。藪から棒に……。海面急上昇が地殻へ影響をおよぼし、地震が起きやすくなると何度も言ってきたではないか」

彼は今更なに言うかともいうように勢いよく言う。

「うん、耳にタコが出来るほどな。連中が、この度の地震で認識を新たにできているので確かめたまでだ」

斉木はこれまで対策会議に出ていたという。実際に被害を目の辺りにして、議論に変化が現れだしているらしい。

「ふん、そんなこつちや」

「そういうな。もし、海面急上昇で被害がさらに増幅されるとなれば、考え直さなければならなくなる。本当に増幅しているのか」

「多分な……」

「それでいつ行くんだ、現地調査に」

「朝早く出る。日帰りの予定だ」

「へりじゃないんだな」

「いや……」

彼は車で行くつもりだった。被害調査のついでに九鬼の実家を訪ね、アキラの元気な姿を確認しておきたかった。九鬼に報告するには明確な情報を掴んでおかなければならないのだ。

「車か。オレも行ってみたいな。車なら一人ぐらいのスペースが空いてあるだろ。カメラマンも一緒か」

「……」

彼の脳裏に、突然、佐橋祐子の面影が浮かんだ。超高層マンションの非常階段で彼女が事故死してから何年になるか。もう五年か六年前のことになってしまったのか。彼はふと彼女にも幼い一人息子がいたことを思い出した。車で行くなら、途中、彼女の実家も訪ねることもできると思った。

だが彼はこれまで九鬼の一人息子アキラのことも、佐橋祐子の一人息子のことも、すっかり忘れていた。数年の間、彼は一度も彼らのことを思い出さなかった。思い出してもどうこうすることはなかった。それなのに、なぜ急に思い出されたのか。

九鬼がACARへ移るときも、彼には一人息子についてなんの話もなかった。東北の小さな街で医院を開業している弟夫婦と一緒に住んでいる年長いた母親に預かってもらっている、と以前聞いたことがあった。九鬼が実家と連絡が取れないと電話してきたとき、反射的にそのことが彼の脳裏に浮かんだのかもしれない。だが、佐橋祐子がなぜ思い浮かんだのだろうか。アキラのことに引きずられて、佐橋祐子にも一人息子がいたことが思い出されてきたのだろうか。

「おい、ぼんやりして、一体、なにを考えているんだ。いいな」

「うん……」

「分かっているのか。ここで待っているから、明日、迎えに来てくれ」

彼は椅子からおもむろに立ち上がると、踵を返してドアへ向った。後ろで齊木の声したが、彼にはなにも聞こえなかった。

40

「佐藤くん、いま、新国際空港に着いたところだ」

彼が用事を済ませ、そろそろ出掛けようと机から離れかけたとき、電話が鳴った。九鬼だった。

首都圏島沈没後、新首都計画の一環として新国際空港も建設されたが、取りあえず旧来の小型飛行機用の空港を拡張整備したものだ。新国際空港といっても、未だ三〇〇〇メートルの滑走路が一本しか使用できず、各国際都市からの直行便が少なく、都心から三〇キロ離れた丘陵地帯にあった。

一時間ほどして、九鬼が現れた。いつもと違い、浅黒い無精髭の憔悴した顔に眠そうな目があった。直行便がとれず、何度か乗り継いで来たらしく、殆ど眠れなかったという。

「連絡は……」

「まだ……」

擦れた低い声だ。

「インターネットで送くるつもりで上空から撮ったビデオは用意できているのですが、もう一度地上で確認してからと思つて、これから現地へ出掛けようとしていたところですよ。どうですか……」

彼は疲れている九鬼を一休みさせたかったが、待機している齊木が気になつて、つい急かせてしまう。

直ぐアキラを探しに行きたいという九鬼をとめない、彼は社の車を自分で運転して齊木を迎えに行く。合同庁舎ビルのエントランスで待っていた齊木をピックアップすると車は高速自動車道に入る。

車が連なつて走っていた。大型トラックが多かった。彼はトラックを避け、車線を変え、アクセルを踏む。

「二、三時間かかるでしょう。仙台に着いたら起しますから、休んでいてください」

彼は後部座席の九鬼に声をかけると、スピードを上げた。

41

「先生、もうすぐ仙台ですが、もつと先まで行きますか」

佐藤はミラー越しに後部座席を覗く。

九鬼はすでに目を覚まし、窓から外の風景を眺めていた。

「古川インターまで行けますか。でもこの辺はこのたびの地震の被災地ですよ。被害がなかったのですか。この高速道路には被害がなかったのですかね」

「徐行区間があるようです。この先、通行止めの箇所がありますね。つぎのインターで降りて、一般道路を行きましょう」

彼は前方の通行止めの標識に気付いて速度を緩めた。高速自動車道に乗るときには気付かなかったが、やはり地震で被害を受けていたのだろうか。

一般道路は混雑していた。被災地への車がつづく。何度か渋滞に遭遇したが、カーナビを頼りに小道を通り抜け、ようやく九鬼の実家付近に近づく。

「ひどいな……」

九鬼が後部座席で叫ぶ。助手席の斉木も前屈みにフロントガラスに身を寄せ、目を見張る。

辺り一面に自動車や家屋の残骸が散乱している。

車を道路に止め、用意のゴム長に履き替える。車を降りると、道路一面に泥が積もり、まるで水田の跡のようであった。

被害を目の辺りにして、彼は寒けを感じた。足がすくみ、彼は道路端に立ちつくしていた。

「いやに冷たい風が吹くな。ヤマセか、これじゃ、不作か……」

「いまごろ、ヤマセが吹くかな……。二メートルを超す津波が押し寄せたんだ。不作もない。ゼロだよ、ゼロ作だ……」

この住民か、数人がたむろしている。ひとりが誰に言うとはなしに呟

く。

「まえの巨大津波のときはどうだったの……」

彼は尋ねた。

「あのときはここまで来なかった。今度も来ないと、誰もが思っていたんじゃないかな……」

「誰も避難しようとしなかったのですか……」

押し黙って誰も応えない。斉木は少し離れたところから彼を見ている。彼はしかたなく歩き出す。遠くの方に九鬼の姿があった。

コンクリートの土台だけが剥き出しになっていた。ペットボトルや発泡スチロールの箱に混じって、ところどころに泥まみれの自動車や家屋の残骸がころがっている。板切れや柱の多くは引き潮で持っていかれてしまったのか。高圧線鉄塔や植木の枝にビニール袋や紙切れがひかかっている。流されてきた自動車や柱が押し倒したのか、道路端の電柱が軒並み倒れている。電線にもゴミや木くずが付着していた。

「ここが家のあったところだ。母屋土台と診療室のあったコンクリートの建物の一部が残っているだけだ。アキラたちは……」

九鬼が近づいてきた二人を見て、呟くように言う。

「津波が来るまえに避難したらいいですよ、みなさんは……」

とつぎに嘘を言い、彼は素早く斉木に目配せする。

「山の方に避難したのかな……」

九鬼は遠くの方へ目を向け、力なく呟く。

「どうしてこんな奥まで津波が押し寄せたのですか」

斉木が九鬼を見る。

九鬼は弱々しい視線で斉木を一瞥しただけだった。

「これから住民たちの避難場所へ行ってみましょうか。なにか情報があるかもしれませんよ」

彼は勢いよく言う。なんの当てもなかった。避難場所へ行けば、かえって住民たちが避難するまえに津波に襲われてしまったことがバレしてしまうだけではないか。彼は不安に駆られ、足がすくみ、その場に立ちつくしていた。

だが九鬼はそんな彼を促すようにさつきと車へ引き返していく。彼は仕方なく歩き出し、九鬼の後をとぼとぼ付いていった。

42

「T地区ですが……」

中年の担当者は重い口をようやく開いたが、虚ろな視線を床に座り込んでいる被災者たちに向けたまま、後がつづかない。

「そうです」

九鬼はじつと担当者の目を見て、口を開くのを待つ。

僅かな高台にある三階建ての市役所ビルは無傷で、津波の避難場所となっているのか、そこには大勢の人びとが集まっていた。

九鬼と斉木を先に降ろし、佐藤は駐車場を探して車を停めると、市役所に入っていく。エントランスホールにつづく幅広い廊下も大勢の避難者で溢れていた。

机や掲示板が並んでいるホールの一角で作業服の中年男と話している九鬼と斉木の姿を見付け、彼は近寄っていく。

「この辺には一メートルから二メートル程度の津波が襲ってきたようですが……」

担当者は掲示板の一点を指した。そこには大きな全市街地図が張ってあった。

「現地に行ってきたところですが、殆どの家屋が押し流されていました。住民は避難できたのですか、津波のまえに……」

「地震の数分後でしたので……」

九鬼は肩を落とし、じつと担当者を見つめている。

「九鬼のよういちろうさんじゃないかな……」

後ろから老人の声がした。

振り向いた九鬼の顔を見て、小柄な老人は頭に被っていた手拭いをとった。ごま塩の坊主頭に額に深い皺の黒く日焼けした顔が現れた。

「やつぱり、そうだ」

老人はしげしげと九鬼の顔を眺めている。

「……………」

九鬼は誰か思い出せないらしい。

「しんじろう先生にここまで送ってもらって助かったが……」

「弟は……」

「なんでも良子さんを迎えにいくとか言ってたな」

「母と小学校で同級だった斉藤さんでしたか……」

九鬼はようやく思い出したらしい。

「うんだ……」

老人は笑みを浮かべ、何度も頷いている。

「それで弟はどこへ……」

「どこかな。良子さんはお孫さんと一緒に湯治にいつていると聞いていた  
だな。さあ、どこへ行ったのか知らねいな……」

老人はすまなそうな顔をして頭を傾げ、手拭いを被ると去っていった。

九鬼は老人の後ろ姿をいつまでも眺めている。

「弟さん一家は津波に遭わなかったんだ……」

佐藤は横で老人とのやり取りを一部始終見ていた。

九鬼はじつと彼の顔を見た。だが九鬼の目はどこか遠いところを見てい  
るようであった。

彼は九鬼を促し、掲示板の尋ね人欄に弟一家の家族の氏名を書き込ませ、  
連絡先としてM新聞佐藤気付九鬼陽一郎と書き込むと、担当者に挨拶して、  
三人は市役所ホールを出た。

外に出ると、妙に冷たい風が吹いていた。

「おう、寒い。まだ、九月にもならないのに、木枯らしみたいな風だな」

齊木が大声を出し、身体を縮める。

「どうしたんですかね。やはり、海面急上昇と関係があるんですか。それ  
とも地球自体が狂ってしまったのですか」

齊木は沈んだ顔をしている九鬼に顔を向け、鼓舞しようとするかのよう  
に明るい声を出した。

「……………」

九鬼は相変らず沈んだ顔だ。

「弟さん一家はどこかの温泉場でのんびり過しておるんですよ。直ぐ、連  
絡が入りますよ」

「うん、そうであればいいが……」

「そうに決まっている」

「津波に遭ったかもしれない……」

「たとえそうでもダメだと決めつけることはまだ早い。たとえ、津波にさ  
らわれても生還することがある。齊木もわたしも、首都圏島沈没の際に海  
に投げ出され、漂流の果てにこうしているんですから……」

九鬼は彼と齊木の顔を上げしげと見ていた。しばらくして「そうだね」  
と言い、力なく笑みを浮かべた。

彼は二人を車に押し込むと、車を九鬼の実家跡へ戻した。

九鬼はじつと車窓から眺めていたが、降りようとしなかった。彼はその  
まま通り過ぎると、高速自動車道をめざした。

#### 4 3

「齊木さん、さっきの冷たい風のことですが、あれは今回の海面急上昇の  
後遺症みたいなものだと思いますよ……」

ようやく落ち着いたのか、九鬼は車窓に目を向けたまま、後部座席から  
助手席の齊木に向って喋り出した。

「ヤマセと違うのですか」

齊木は身体をねじって、ちらつと九鬼に目を走らせた。

ヤマセ（山背）は東北地方の太平洋側を梅雨から盛夏の頃にかけて吹く  
冷湿な北東の風で、凶作になると恐れられていた。オホーツク海高気圧か  
ら吹き下ろす冷たい風だが、さっきの冷たい風はヤマセとは違うらしい。

「グリーンランド氷床が大量に北極海に滑落したときに、いくつかの巨大  
な冷水塊が出来た。氷が融けて出来た淡水の冷たい水塊で、周囲の海水

とはなかなか混じり合わず、比較的表面に浮いているのです。それらが北極海から流れ出て、そのなかの巨大なひとつが北大西洋へ、もうひとつが北太平洋へ向ったらしい。北太平洋へ向った冷水塊がベーリング海峡を通り抜けるときに二つに分かれて、そのひとつが北米大陸西海岸の方へ、もう一方が親潮に乗って南下しているのでしょう。オホーツク海へ向ったのもあるでしょうが、親潮に乗った巨大冷水塊が三陸沖付近にしばらく停滞しそうですね。多分、いまごろは北海道太平洋側あたりあるのかもしれない。それが冷たい風の原因だと考えられるのです……」

「しばらくつて、いつごろまでつづくのですか」

「いつまでかは分かりません。でも、少なくとも一年や二年はつづくでしょう。いや、数年かもしれない」

「その間、親潮の流れが止まるのですか」

「いや、冷水塊は表面に浮いている状態で停滞し、その下を親潮が流れているです。親潮が止まることはないでしょうが、今後この海流が弱まる可能性がありますね。そうになると、冷水塊の停滞が長くつづくことになるかも知れません」

九鬼は一息ついた。そしてふたたび、車窓へ目を移す。

「あの冷たい風の原因が冷水塊だとすると、ヤマセとちがつて、一年中冷風が吹くことになるわけですか。これまで熱風吹き荒ぶ焦熱地獄だと思っていたら、今度は冷風が吹き荒ぶ冷害、凍結地獄ですか。それでは日本の食糧はどうなる……」

齊木は絶句する。

地球温暖化が進むなか、日本の食糧供給基地は北へシフトしていたものの、海面急上昇で日本列島の海岸辺りの平野は大半水没してしまった。西

日本では毎年のように干害が襲い、北海道や北東日本に残っている農地だけが頼りだったのだ。

だが冷害が心配なのは北海道や北東日本だけではなく。高地に残っている農地も冷害を受けることになるだろう。

「おい、地震じゃないか」

突然、運転している佐藤が叫んだ。速度を落とす。後続車が間近に迫る。アクセルを踏んだ。前の車に急接近する。

「震源は茨城県沖だ……」

ナビのテレビのテロップを見て、齊木が叫ぶ。

走行している車が次第に減速し出していた。なかには非常用レーンに停車する車もあったが、車の走行はつづく。

「つづいて大きいのが来るかも知れない。佐藤くん、非常用レーンに車を寄せたほうがいいかも……」

車が非常用レーンに入って急減速する。

そのとき、大きな上下震動が来た。

「おお……」

彼はハンドルを取られそうになって、悲鳴を上げた。

急停止した車が大きく上下に揺れている。

彼はハンドルにしがみつき、九鬼も齊木も座席をしっかりと押さえ、へばりつく。

車のスプリングが軋む。

五秒ぐらいか、それとも一〇秒以上か。突き上げるような上下震動につづいて、かなり長い横揺れが襲った。

三人は息を殺し、じつと揺れが収まるのを待った。

レーンを走っている車がつぎつぎに急停止する。追突事故が起きた。高速自動車道には車の行列ができた。震動が収まると、車から運転者が出て、今度は言い争い、怒鳴り合いがはじまった。

遠くで、サイレンの音がする。

「この地震も海面急上昇と関係するのですか」

斉木が後部座席を振り向き、九鬼に顔を向ける。

「ええ、世界の地震地帯では、今後、地震が頻発することになるのです。火山地帯では火山の噴火に悩まされることになります」

九鬼は短く、確信をもって応える。

「そうですか……」

半信半疑の響きがあった。斉木にはこのところつづく天変地異が地球温暖化とどう関係するのか理解できないらしい。

「このままここでしばらく様子を見ることにしましょう。道路は停車した車で満杯状態だし……」

彼が振り向き、口を挟む。この一言に誘われたように、九鬼が話した。

「二〇年近く研究をつづけていたのに、最近になって、漸く気付いた、いや、気付かせられたと言ったほうが正しい。それは……」

九鬼はしばらく口を閉じたままじつとしていた。真剣勝負を控えているような緊張した面持ちで、静かに呼吸を整えている様子だった。

「長い間、気候変動予測研究に取り組んできたが、気象は気象だけでなく、海洋や地殻にも関係していることを知り、素人と蔑まされても地震予測や海面上昇予測まで手を出してしまい、いまでは地球システム全体を研究対象としてしまった……」

九鬼は一瞬、顔を歪め、苦笑いを浮かべた。

「偉そうなことを言ってしまったけれど、研究の範囲を広げただけで、深めたわけではない。すべてが素人域にすぎない。でも研究対象を地球システム全体に広げたために、これまで見えなかったことが見えてきたような気がする……」

九鬼はもう一度確かめるように、あたりを見回した。佐藤と斉木を見た。

「自分が一生懸命研究して正確に予測したいと思っていたことは、地球システムが描いたシナリオにすぎなかった。このことに最近ようやく気が付いた、いや、気付かされたのだよ……」

九鬼は「そうだったのだ」と言うように、何度か小刻みに頭を上下した。

「地球システムは前半の生成過程を通り越し、現在後半の収束過程にある。いま、地球システムは最終段階へ向って進んでいるのだ。われわれ人類はこの地球システム（自然）が育んだ生命の一環として生みだされたが、いまや、予期に反して地球システムに刃向かう凶暴な存在と化してしまった……」

なぜそうなったのかと問うように、九鬼は天を仰ぐ。

「地球から見れば、人類は地球システムの過程のなかで生まれたひとつの夾雑物ともいうべきものにすぎない。それなのに、人類はいつのまにかまるで独裁者のようにわがもの顔に振る舞い出し、地球システム（自然）から収奪の限りを尽くし、地球を気尽に改変しはじめているのだ。それも巨大な力で地球システムを攪乱するまでになったのだ……」

九鬼は天を仰いだままつづける。

「だが地球システムは他から攪乱されるままでいることはない。地球システムの進む道や展開過程を邪魔ものや妨害するものは必ず徹底的に排除あ

るいは抹殺するのだ。とにかく、誰であろうと、刃向かうものや障害となるものには容赦なく、決して許すことはないのだよ……」

「ということは……」

齊木が口を挟む。

「そうだ。地球システムは全システムをあげて、人類が持ち込んだ攪乱要因を徹底的に排除することだろう。現在、日本列島に、いや、全世界に起こっている気候異変、海面急上昇や頻発する地震など、さまざまな天災や地変も元を糺せば地球システムの攪乱制御抑制の動きに過ぎない。それが人類にどんな影響がおよぶかについては、地球システムの関知するところではないのだ。いいかえれば、地球上の生命とはいえ、地球システムにとつて邪魔になるものは抹殺するということだ。逆に言えば、生命は地球システムが許容する範囲でしか地球上に生存することができないということなんだね」

九鬼はかわるがわる齊木と彼の顔をじつと見た。

「地球が許容する範囲か……」

しばらくして、齊木が独り言のように呟く。

「気候変動予測モデルを全地球システムモデルへと展開してみて、いままでばらばらな現象として見ていた地球システムにおける現象が互いに関係しあつて攪乱要因に向つていることに気付いたんだよ。いままで、人間活動から吐きだされた大量の二酸化炭素などの人為的温室効果ガスによる地球温暖化からもたらされる気候変動や異常気象を人類への影響といった観点からしか見ていなかった。そして気候異変や極限異常現象の予測に躍起となつていた。だが予測は予測に過ぎず、空虚なエンドレスな行為だった。だから、一時、研究を止めようと思つたのだつた」

九鬼は過ぎ去つた日々を思い出すような目で佐藤の目を覗く。

彼は九鬼の話を何度も頷きながら聞いていた。

彼はいまようやく、一度研究を捨てるといった男がなぜ一人息子を残してまで異国の研究機関へと旅立つていったのか、分かつたような気がした。

あのときは恩師であり義兄でもあつた佐々木教授の死に直面し、さらに、結婚することを考えていた佐橋祐子も事故死で失うという衝撃が九鬼を日本から飛び立たせたと思つていた。これらもひとつの契機となつたかもしれないが、それよりも九鬼は予測のさきにあるものに魅かれてというより、人間本位の傲慢さに気付き、地球システムの声ならぬ声に誘われて旅立つことになつたのだ。

そしていま、ついに地球システムの声を聞いた九鬼が一人息子の安否を思い、米国から飛んで帰つてきたのだ。彼はあらためて、九鬼の顔を見た。いつのまにか、止まつていた車の行列が動き出していた。



# エピソード

地球温暖化の果てにグリーンランド氷床が激しく溶融し出し、ついに大滑落が生じ、全世界に一〇メートルにもおよぶ海面急上昇をもたらした。

突然日本列島をそして世界を襲った今回の海面急上昇事件はグリーンランド氷床の大半が海へ滑り落ちて一段落した。グリーンランドから三〇〇万立方キロメートルを超える膨大な量の氷が、夏の最中から終りまでの約一か月という短い時間のうちに海へ落ちていったのだった。

地球表面の七〇パーセントを覆う海洋の海面が、今回の事件で数メートルから一〇メートルを超えて上昇することになった。日本列島周辺では海面が平均一〇メートル上昇した。

だが地球温暖化の果てに生じた海面上昇はこれで終りではなかった。南極大陸にはいまだこの一〇倍の量の氷床が残っている。今後急速に地球が寒冷化していくならばともかく、もし、このまま地球温暖化がつつけくかぎり、いずれ南極大陸氷床の大崩落大滑落がはじまることだろう。

海面急上昇は、日本に限らず、全世界に対して、これまでの大雨、洪水、日照り、熾烈な熱波や巨大台風（ハリケーン、サイクロン）といった異常気象や気候異変とは次元の異なる一撃となった。

一挙に、海洋が広がり、陸地の面積が減少し、世界地図は一変した。都市や村が水没し、農地が奪われ、舟が流され、入江や砂浜が消えて、農業や漁業ができなくなった。臨海工業地帯では工場や発電所が操業不能となつてしまった。

住まいを奪われ、働き口を失い、生業を喪失した何千万、何億、何十億

の人びとが新たな土地と食べものを求めて世界を彷徨う。

首都圏エリアの関東平野が日本列島から切り離されて分離され、そして沈没してしまってもそれは日本だけの問題だった。たとえ、東京が世界の金融や経済のネットワークのなかでのひとつの重要な拠点国際都市だったとしても、世界にとって絶対的に不可欠のものではなかった。世界は東京が無ければ無いで処理できることだった。

首都圏島沈没は日本だけの問題だった。だがこれは日本だけの問題ではなかった。日本だけの問題のように見えたが、実は日本だけの問題ではなかったのだ。首都圏島沈没はすべてのはじまりの合図だった。

首都圏島沈没に対して、海面上昇は分かりやすかった。海面急上昇は海に面した国々ばかりでなく、海に面していない内陸国にも直接間接影響をおよぼすいわば世界全体の問題だった。だが周囲が海であり、長大な海岸線の島国であり、地震多発地帯に位置する日本列島にはさらなる困難が控えていた。

海面上昇は地球温暖化のひとつの結果ともいうべき現象だが、海面が急上昇しただけではおさまらない。海面急上昇は海洋大変動をもたらし、さらに、気候変動を加速し、地殻変動を引き起こすことになるのだ。

地球温暖化がもたらした気候変動が大気大循環の変調を引き起し、自転速度を変え、マントル循環の変動を誘い、プレートに異常な動きをもたらしたように、海面急上昇とこれにともなう海洋大循環の変調から、さらなるマントル循環の変動をよび起こし、地殻変動を起しつつあったのだ。

地球温暖化に起因する気候変動が単なる気候変動に止まらなかつたよう

に、海面上昇もまた単なる海面上昇に止まらないのだ。地球温暖化にともない表層に現れたこれらの出来事や現象は、深く地球システム全体と関係しており、地球システムの攪乱によってもたらされたものだった。

問題は、地球システムのような巨大なシステムが攪乱を起すとなかなか制御することができないことだ。その結果、攪乱を起した巨大システムは、往々にして、破局を迎えることになる。

地球は攪乱したシステムを自らリセットして新しいシステムをつくりだそうとしているのだろうか。

(第二部 完)

(この物語はフィクションであり、登場する人物および団体名は実在するものと一切関係がありません。)

続地球温暖化の果てに第二部―やせ細る列島

生野以久男

二〇一〇年一月一〇日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2010

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 [www.kinokopress.com](http://www.kinokopress.com) 内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁じられています。

ISBN なし